資　料

NPOこめっこの
活動紹介

1．『こめっこ』活動の広がり

2．こめっこのねらいと目的

3．べびこめについて

4．こめっこについて

5．もあこめについて

6．相談支援事業「ひだまり・MOE」について

『こめっこ』
活動の広がり

久保沢　寛

大阪府手話言語条例（2017.3.29公布・施行）

大阪府言語としての手話の認識の普及及び習得の機会の確保に関する条例

第三条（手話の習得の機会の確保）

府は、市町村、聴覚障害者の日常生活及び社会生活の支援を行う民間の団体並びに学識経験のある者と協力して、

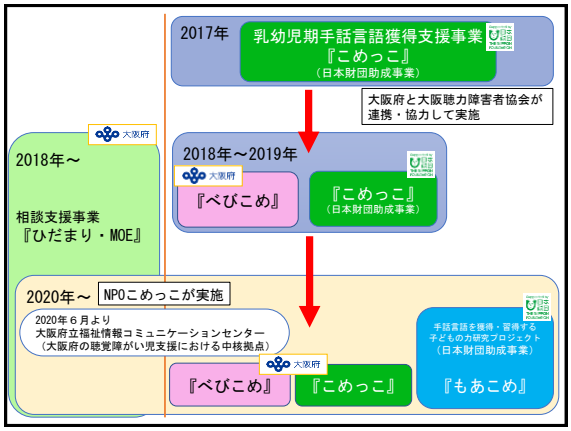
聴覚障害者が乳幼児期からその保護者又は家族と共に手話を習得することのできる機会の確保を図るものとする。

「乳幼児期手話言語獲得支援事業」

○きこえない乳幼児が手話言語を自然獲得するためには、日常生活の中で手話言語に接していくことが必要。

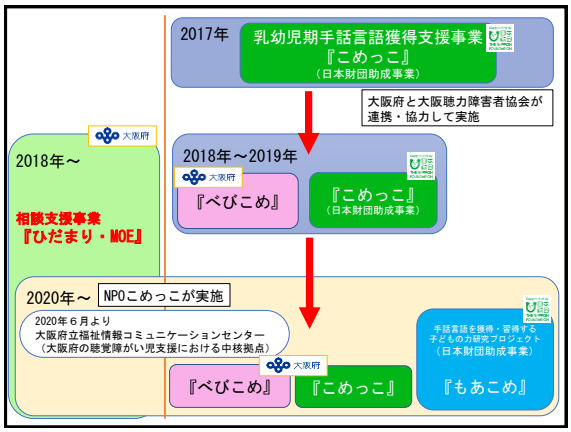
⬇

乳幼児期から
「手話言語獲得を支援する仕組み」が必要



こめっこのスタッフ

- ○ろうスタッフ
- ○通訳兼任の聴スタッフ
- ○手話のできる学生聴スタッフ
- ○公認心理師・臨床心理士



「こめっこ」のねらいと目的

大阪府手話言語条例評価部会長・こめっこスーパーバイザー

河 崎 佳 子 （神戸大学）

「こめっこ」
べびこめ・こめっこ・もあこめ

きこえない子どもたちが、

手話を獲得し、

手話で学び、手話を学ぶ 場

言語としての手話

手話（Sign Language)は独自の文法をもつ

手話は自然獲得される（母語となる）

ネイティブサイナー
native signer

手話(sign language)を自然習得（獲得）したサイナー

手話で話すときには、頭の中に日本語がない

手話を「映像言語」として、そのまま理解する

こめっこの活動において

子どもたちの前に立つのは、

ネイティブ・サイナー／バイリンガル・サイナー

保護者に向けては、すべてのやりとりに手話通訳・

音声通訳を保障 （子どもだけの活動は手話のみ）

こめっこ活動のねらい

あそび 絵本よみ 手話劇 クイズ などをとおして

◆ べびこめ 0歳～3歳 ＜手話の獲得＞
ママパパと共に、人とかかわる楽しさを知る
自然習得できる言語（日本手話）に出会い、意味を知る

◆ こめっこ 3歳～6歳 ＜手話の獲得＆習得へ＞
語彙を広げ、手話文法力を高める
手話で知識の世界を広げる

◆ もあこめ 小学生 ＜手話の習得＞
手話力のスキルアップ ～よみとり＆表現～
知識を広げ、思考する楽しさを共有する

子どもたち、こめっこをとおして	保護者は、こめっこをとおして
「わかること」「伝えられること」を実感する	笑顔いっぱいに楽しむ子どもを見る
ルールがわかる	ルールがわかる子どもを知る
プロセスがわかる	プロセスがわかる子どもを知る
多くのロールモデルと出会う	子どもの将来をイメージする
マジョリティー体験をする	目で生きる子どもを実感する

聴覚活用（補聴器や人工内耳）と
手話言語獲得は
両輪をなすもの

療育（聴能訓練や口話訓練）や
医療（人工内耳装用）との両輪で、
手話言語獲得は、
日本語の習得に寄与

大切にしている活動

手話ぱんぱん　絵本よみ　手話劇　きゅっとものがたり

独自の文法・表現・リズムに出会う

↓

手話言語を読み取って理解する力を育てる

手話言語で伝える力を育てる

手話ぱんぱん

手話ぱんぱんは、ネイティブサイナーが日本手話から作り出す作品です。その表現に含まれる固有のリズム、間合いや流れ、動きの抑揚や強勢は、まさに手話のプロソディーといえるでしょう。

こめっこでは、活動の中でこの手話ぱんぱんをとても大切にしています。こころ惹かれる手話ぱんぱんを繰り返し楽しむことで、幼いこどもたちは自然に手話を吸収していきます。

また、手話の意味とリズムを活かした日本語訳を工夫しています。

手話から生まれる 手話ぱんぱん

ろうスタッフが相談して、手話ぱんぱんを作ります。

聴スタッフが、日本語訳を考えます。

ろうスタッフにも確認しながら、訳を練ります。

発表！　まずは手話だけ　→　日本語訳も付けて

乳幼児と保護者が、いっしょに楽しんで吸収

みどりぱんぱん

いろいろな手話ぱんぱん

◆**定番の手話ぱんぱん**　毎回の活動のはじまりとおわりに必ず使う
　こめっこぱんぱん　べびこめぱんぱん
　おなまえよび　おたんじょうびぱんぱん　おかたづけぱんぱん

◆**生活ぱんぱん**　日常生活のなかでママパパと乳幼児がやり取りを楽しめるように
　おむつぱんぱん　おふろぱんぱん　など

◆**季節ぱんぱん**
　お正月　豆まき　さくら　かき氷　紅葉　・・・　クリスマスぱんぱん　など

◆**あそびのぱんぱん**
　おべんとうぱんぱん　でてくるなにかな？　こころぱんぱん　など

◆その他

手話劇　&　きゅっとものがたり

◆手話劇

話の流れを共有するための簡潔なシナリオを共有
30分ほどのリハーサル（衣装や小道具はほとんどなし）
すべて、ろうスタッフで相談して進める
その様子を見ながら、読み取り通訳もリハーサル
本番！

◆きゅっとものがたり

物語のエッセンスを絞り込んだ、小粋な手話作品
（ろうスタッフが日本手話で制作し、日本語訳を付ける）

手話ぱんぱん　きゅっとものがたり の紹介

◆定番の手話ぱんぱん

●べびこめ　べびこめぱんぱん　https://youtu.be/8pjvqs_jDI0

●こめっこ　こめっこぱんぱん　https://youtu.be/ykA8A6DBO8

●かかたづけぱんぱん　https://youtu.be/uYtsaZ8OCjs

◆季節ぱんぱん

●おこめぱんぱん　https://youtu.be/UJ8h_FlqXqM

●とんぼぱんぱん　https://youtu.be/DBP2AKk23HY

●みどりぱんぱん　https://youtu.be/OnsNawMkJAY

◆生活ぱんぱん

●おむつぱんぱん　https://youtu.be/m9FSG3w6Hw

●おやすみぱんぱん　https://youtu.be/sb4FfCxcrY

◆きゅっとものがたり

●はだかの王様　https://youtu.be/lqOR1DFbiNg

「こめっこ」の目的

べびこめ・こめっこ・もあこめ

1．子どもの手話言語獲得ならびに保護者の手話習得を支援
2．手話に開かれた豊かなコミュニケーションを親子で体験
3．愛着形成を確かなものにすること
4．成人・青年ろう者との出会い → アイデンティティ形成
5．手話をスキルアップ
6．さらに知識を広げ、思考する力をつける

ご視聴

ありがとうございました。

べびこめ
（BABYこめっこ）

０～３歳児

物井明子

活動内容　べびこめ

- ０～３歳児を対象
- 週２日　１回１時間半の活動
- 家族みんなで参加できる場所

(30分)	全体あそび（家族みんなで）			
(30分)	保護者	手話学習	こども	自由あそび
(30分)		交流		

全体あそびについて

べびこめ活動

全体遊び	オープニング	べびこめぱんぱん
	しゅっせきかくにん	おなまえよび
	こめっこぱんぱん	
	キャラクターあそび	とんとんとん
	本日のぱんぱん	季節ぱんぱん　四季に合わせた内容を1か月に２つ
		生活ぱんぱん　（おむつぱんぱん、はみがきぱんぱん、おやすみぱんぱん等）
	本日のあそび	出てくるなにかな・なにする？等
	たいそう	どうぶつ・こんちゅう・オリンピック等
	えほんよみ	
自由あそび		
終了	エンディング	おかたづけぱんぱん

全体あそび

オープニング
べびこめぱんぱん

おなまえよび

こめっこぱんぱん
こめっこのテーマぱんぱん

とんとんとん

全体あそび

本日のぱんぱん

本日のあそび

たいそう

えほんよみ

季節ぱんぱん
生活ぱんぱん

全体あそび

手話学習会について

○ 家に帰ってすぐ使える、
　　育児に使える内容から始める

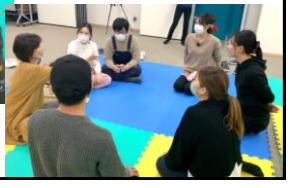
○ 必ず２語文、３語文にして学ぶ

○ 徐々にテーマを広げていく

手話学習会（写真）

保護者交流について

○ テーマを決めて自由にお話をする
　　「子育てについてたずねたいこと」
　　「お休みの間に成長したこと」
　　「きいてほしいこと」
　　「わが子自慢」など



コロナ禍から得たもの

〇活動自粛期間中に動画配信を行う（2020年３月～６月）

〇NPOこめっこ版「おかあさんといっしょ」
　　継続して配信している

河﨑ら（2021）

〇DVD「まいにちべびこめ」「まいにちこめっこ」

ご清視・ご清聴ありがとうございました

こめっこ

０～６歳児

久保沢　寛

１．土曜日こめっこ

従来のこめっこ活動の流れ

毎月第１、３土曜日　１３：３０～１６：００

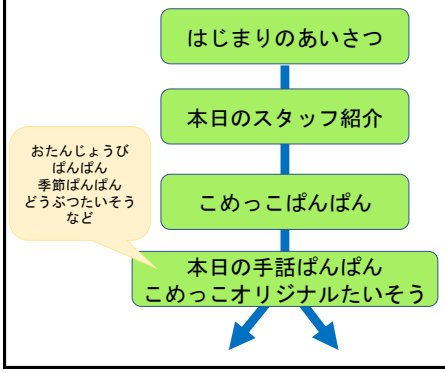
第一部	＜全体での活動＞	
	スタッフ紹介（おなまえよびぱんぱん）、手話ぱんぱん、絵本よみ	
	０～２歳児のグループ	３歳以上のグループ
	子どもたちのなまえよび 絵本、手話ぱんぱんなど	楽しみながら、手話に触れるあそびをする （手話つくろう、クイズ、ゲームなど）
	保護者も一緒に やりとりをして楽しむ	※保護者は参観
休　憩		
第二部	保護者	３歳以上の子どもたち
	手話ろうタイム１０１（ミニ手話学習会） ミニレクチャー・保護者交流・講演会 ※０～２歳児は保護者と同室で スタッフと遊ぶ （絵本、パズル、お絵かきなど）	部屋を移動してスタッフと遊ぶ ルールのある遊び （カードゲーム・表現あそび・競争ゲーム等） 絵本よみ

現在のこめっこ活動の流れ（2020年7月以降）

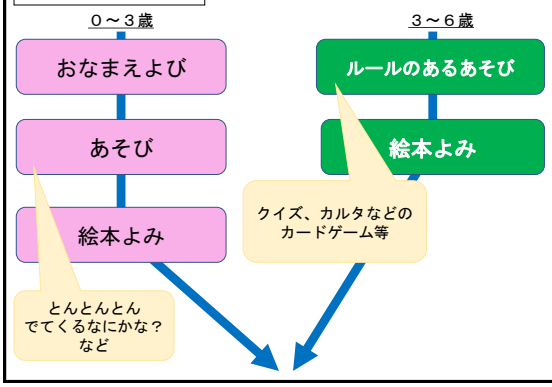
毎月第１、３土曜日　１４：００～１５：００

全体活動	
はじまりのあいさつ、スタッフ紹介（おなまえよび）、こめっこぱんぱん おたんじょうびぱんぱん、季節ぱんぱん、どうぶつたいそう	
グループ活動	
０～２歳グループ	３歳以上グループ
子どもたちのおなまえよび 手話ぱんぱん 絵本よみ 保護者も一緒にやりとりをして楽しむ	ルールのあるあそび （クイズ・カードゲームなど） 絵本よみ 保護者は参観
休　憩	
全体活動	
手話劇、きゅっとものがたり、おかたづけぱんぱん、おわりのあいさつ	

全体活動



グループ活動



全体活動

手話劇

↓

きゅっとものがたり

↓

おかたづけぱんぱん

↓

おわりのあいさつ

１．土曜日こめっこ

従来のこめっこ活動の流れ

毎月第１、３土曜日　１３：３０～１６：００

第一部	＜全体での活動＞	
	スタッフ紹介（おなまえよびばんばん）、手話ばんばん、絵本よみ	
	０～２歳児のグループ	３歳以上のグループ
	子どもたちのなまえよび 絵本、手話ばんばんなど	楽しみながら、手話に触れるあそびをする （手話つくろう、クイズ、ゲームなど）
	保護者も一緒に やりとりをして楽しむ	※保護者は参観
休　憩		
第二部	保護者	３歳以上の子どもたち
	手話ろうタイム１０１（ミニ手話学習会） ミニレクチャー・保護者交流・懇談会 ※０～３歳は保護者と同室で スタッフと遊ぶ （絵本、パズル、お絵かきなど）	部屋を移動してスタッフと遊ぶ ルールのある遊び （カードゲーム・表現あそび・競争ゲーム等） 絵本よみ

２．ほうこめ

（放課後こめっこ：３～６歳児）

ほうこめ活動の流れ

毎月第２、４金曜日　１５：３０～１６：３０

全体活動
はじまりのあいさつ、出席確認、こめっこばんばん おたんじょうびばんばん、季節ばんばん、たいそう
個別活動
絵本よみ 神経衰弱、トランプ、カルタなどのカードゲーム
全体活動
ルールのあるあそび（だるまさんがころんだ、ハンカチ落としなど） 手話劇、おかたづけばんばん、おわりのあいさつ

全体活動

はじまりのあいさつ

出席確認

おたんじょうび
ぱんぱん
季節ぱんぱん
どうぶつたいそう
など

こめっこぱんぱん

本日の手話ぱんぱん
こめっこオリジナルたいそう

個別活動

絵本よみ

ルールのあるあそび

神経衰弱、カルタなどの
カードゲーム

全体活動

手話劇

おかたづけぱんぱん

おわりのあいさつ

コロナ禍での活動

・土曜日こめっこをYouTubeでリアルタイム配信

・毎日の動画配信　→　対面活動再開後も継続

・Zoomでの双方向オンライン支援（放課後こめっこ）

もあこめ
（MOREこめっこ）

小学生

久保沢　寛

土曜日もあこめ活動の流れ

毎月第１、３土曜日　１４：００～１５：３０

こめっこと一緒に活動
はじまりのあいさつ、スタッフ紹介（おなまえよび） こめっこぱんぱん
もあこめ活動
絵本よみ ルールのある遊び
こめっこと一緒に活動
手話劇、きゅっとものがたり
もあこめ活動
話し合い活動、おわりのあいさつ

全体活動（こめっこと一緒に）

はじまりのあいさつ
↓
スタッフ紹介
↓
こめっこぱんぱん
↓

グループ活動（もあこめのみ）

絵本よみ
↓
ルールのある遊び
↓

・〇〇といえば
・クイズ
・体を動かす遊び
・いろいろバスケット
など

全体活動→グループ活動

手話劇
↓
きゅっとものがたり
↓
話し合い活動
↓
おわりのあいさつ

手話劇に
関するクイズや、
スタッフについて
それぞれの考えを
伝え合う。

コロナ禍でのもあこめ活動

Zoomでの双方向オンライン支援

個別zoom　　…第２、４水曜日

グループzoom…第１、３土曜日

活動のまとめ

久保沢　寛

	べびこめ	こめっこ	ほうこめ	もあこめ
参加対象	０～３歳とその家族	０～６歳の未就学児とその家族 きこえない両親と未就学児	３～６歳の未就学児とその家族	こめっこに通っていた小学生
毎回の参加状況	５家族前後～10家族	平均10家族	３～４家族	４～６家族
	○０歳児家族の参加 ○きこえるきょうだいや祖父母の参加	○あそびの内容の広がり	○子ども一人ひとりに合った手話力での関わりと、あそびの提供	○手話力の向上 ○スタッフと子ども間の積極的なやり取りの増加

現在の活動のかたち

こめっこ

０～６歳
第１、３土曜日
対面活動とリアルタイム配信

毎日の動画配信

べびこめ
０～３歳
火・金曜日に活動

ほうこめ
３～６歳
第２、４金曜日に活動

コロナ禍で対面活動休止の時は

ステイホーム
べびこめzoom

ほうこめzoom

もあこめ

小学生

第１、３土曜日に活動
現在はオンライン

第２、４金曜日に活動
放課後もあこめ

第２、４水曜日
放課後もあこめzoom

１ヶ月間の活動予定

	月	火	水	木	金	土	日
１週目		べびこめ			べびこめ	こめっこ もあこめ	
２週目		べびこめ	放課後 もあこめzoom		べびこめ ほうこめ		
３週目		べびこめ			べびこめ	こめっこ もあこめ	
４週目		べびこめ	放課後 もあこめzoom		べびこめ ほうこめ		
５週目		べびこめ					

ひだまり・MOE

中尾恵弥子

ひだまり・MOE

2018年4月　大阪府委託事業として開室
2020年6月　府立福祉情報コミュニケーションセンターにて実施

大阪府

＜対象者＞
聴覚に障害のある子どもさんとそのご家族
聴覚に障害のある保護者とその子どもさん

＜スタッフ＞
聴覚障害を専門とする
公認心理師・臨床心理士等

☆事前予約制
☆相談料無料

＜相談内容＞

・幅広い年齢の子どもさんの「きこえについて」の相談・支援
・ご家族の状況に合わせて、家庭訪問やオンライン面談を実施
・新生児スクリーニングの後、確定診断の前でも利用可能

＜相談支援ネットワーク＞

大阪府立福祉情報コミュニケーションセンター難聴児支援の中核拠点
相談支援ネットワーク運営主体
ひだまり・MOE

偏りのない情報提供　　連携

療育機関　　こめっこ　　聴覚支援学校

お母さん、お父さんのお話をうかがいながら、
赤ちゃんとの笑顔あふれるやりとりを共にはぐくんでいきたい。

そう願って、私たちはお待ちしています。

生涯発達を見据えてZERO TO THREE に大切なこと

「言語獲得」分野から

武居　渡
（金沢大学　学校教育系）

ことばの発達には「形式」と「意味」の
２つの側面の発達を保障することが重要！

言語の２つの側面
形式と意味

○　コミュニケーションは基本的に「意味」の部分のみで成立可能。
○　徐々にコミュニケーションに「形式」が使われるようになる（2歳から3歳）。
○　学習言語の段階に移行するためには、言語の「形式」面に気づくことが不可欠（4歳後半から5歳）。

両親ろうのろう児の手話獲得研究から

結論を先取りすると・・・

聴児の音声言語獲得過程

きわめて類似

聾児の手話言語獲得過程

今回は
- 喃語
- 語彙の発達
- 動詞の語形変化

について話をします。

手指モダリティにも喃語はあるのか

手話の初語がある日突然表出されるとは考えにくい
→初語表出の準備をしているのでは

聾児の音声喃語の出現頻度減少
→言語入力に応じて喃語表出の
モダリティをスイッチしているのでは

A児が表出した
非指示ジェスチャーと手話単語

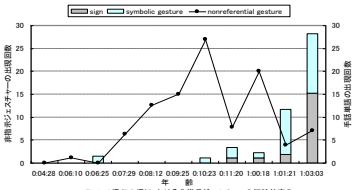
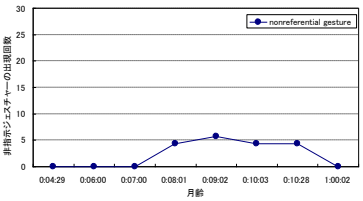


Fig.1　A児（DD児）における非指示ジェスチャーの継時的変化

F児が表出した非指示ジェスチャー



F児（HH児）における非指示ジェスチャーの出現回数

連続性1（車）

Figure 10.2.1.　A児が表出した非指示ジェスチャーと手話初語の連続性を示す例（車）

非指示ジェスチャーの特徴

①初語表出前に出現

②リズミカルな繰り返し

③発達に伴って、手型や運動が多様化

④初語との音韻的連続性

手話言語の獲得において喃語の役割を果たしている

A児における指さし出現回数の発達的変化

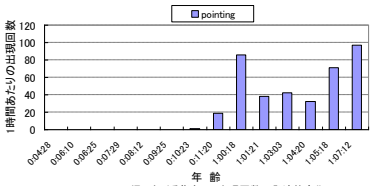
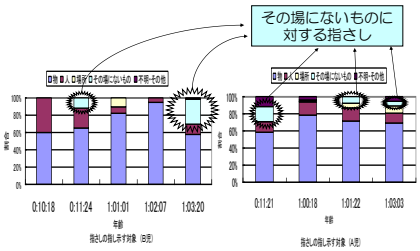
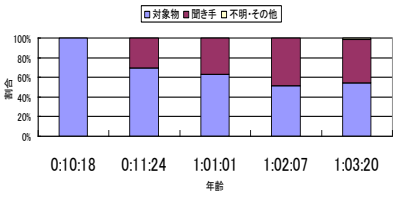


Figure 3　A児における指さしの出現回数の発達的変化

指さしの指し示す対象



指さし時の視線の方向



指さし時の視線の方向（B児）

初語表出前後に見られた聾児の指さしの特徴

- 指さしがコミュニカティブに使用される
  →２項関係から３項関係へ
- 時間、空間を超えて、今ここにあるもの以外にも指さしを使用
  →その場にないものに対する指さしの出現

B児が表出した手話単語に共起した指さしの割合

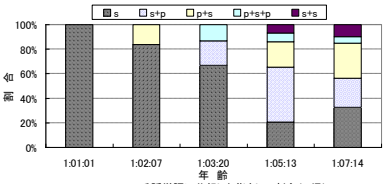
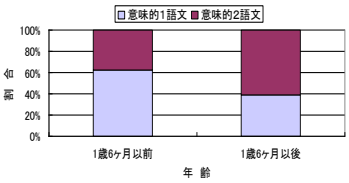


Figure 6 手話単語に共起した指さしの割合（B児）

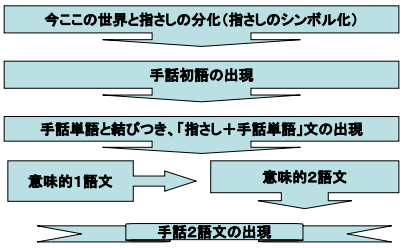
「指さし+手話単語」文の特徴

① 意味的1語文（指さし＝手話単語）
〔PT車の絵　車〕　〔犬　PT犬の絵〕
② 意味的2語文（指さし≠手話単語）
・形容詞文
〔PT車の絵　青〕〔PT廊下　怖い〕
・他動詞文
〔PTウサギ　育てる〕〔PT電話　したい〕
・自動詞文
〔PT調査者　撮影する〕〔PT母親　飲む〕

意味的1語文と意味的2語文の発達的変化（A児）



聾児の指さしの発達的変化



手話の動詞

○屈折動詞
- 動詞の始点・終点が主語・目的語に一致
- 英語やドイツ語では2歳半から3歳前後に屈折動詞を使い始める

○非屈折動詞
- 主語や目的語によって動詞の形が変化しない
- 主語や目的語は語順や他の文法マーカーによって表示される

獲得した動詞の使用状況

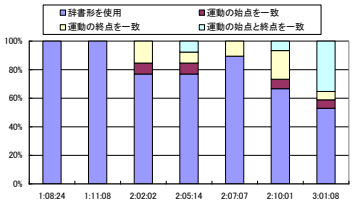


Figure 2 A児が表出した動詞の語形変化についての発達的変化

動詞の誤用例

① 辞書系を使用
セーターを誰にもらったのか聞かれ答える
{おばさん *2-もらう-1} （2歳5ヶ月）
② 過剰般化
絵本の中のネコが驚くのを見て
{PTネコ ネコ-驚く PTネコ} （2歳10ヶ月）

※気になる例
{ PTおじいさん 1-お願い-2 RS PTおじいさん }
（2歳5ヶ月）

このような手話の発達を保障するためには

- 音声言語と同様の発達が手話にも見られる。
- ただし、これらの発達を保障するには、「意味」の発達、すなわち、親子の自然なやり取りや「わかる」経験の積み上げが不可欠！
- 親子の自然なやり取りを保障するためには、保護者に対する手話習得支援が欠かせない。

人生の最初の時期に、
十分な「わかる」経験を積み上げることで
わからない状況に出会ったときに
わかるための手段を講じることができる。

このような手話の発達を保障するためには

- 音声言語と同様の発達が手話にも見られる。
- ただし、これらの発達を保障するには、「意味」の発達、すなわち、親子の自然なやり取りや「わかる」経験の積み上げが不可欠！
- 親子の自然なやり取りを保障するためには、保護者に対する手話習得支援が欠かせない。

聞こえない
子どもにとって
手話の役割は
大きい！

人生の最初の時期に、
十分な「わかる」経験を積み上げることで
わからない状況に出会ったときに
わかるための手段を講じることができる。

言語獲得分野における研究計画

日本語語彙
絵画語彙検査

手話語彙
手話語彙流暢性検査

日本語文法
J-COSS

手話文法
日本手話文法理解テスト

実施済み
2020年
15名
2021年
7名

語用（コミュニケーション）
質問応答関係検査

実施済み
2020年
10名
2021年
3名

検査数を増やし、検査結果の詳細な分析を今後行う予定。

生涯発達を見据えて ZERO TO THRE に大切なこと

「心理発達」分野から

河﨑 佳子

（神戸大学大学院　人間発達環境学研究科）

2020年度シンポジウム 話題提供より

「こめっこ」の早期支援が目指すもの

親子で手話に出会って、愛着形成

ネイティブサイナーに出会って、手話言語の自然獲得

「人とかかわる能力」についての確信を育む

信頼感　心理的に安全な環境
自律性　わかる自分／できる自分
好奇心　安心して探索に出かけられる力（積極性）

手話での豊かなかかわりは、探索・操作・社会性・理解など、複数の発達ラインを刺激し、相乗効果をもたらす

０～３歳にこれだけは！

人とかかわる能力の基礎づくり

コミュニケーション体験のはじまりを豊かにのびやかに
プレフルであることが健康を促進

たくさんのエピソードを共有してきたママパパ（愛着対象）の内在化
＝「生きる自信」（心に安全基地をもつ）

好奇心を原動力に、探索活動、さまざまな能力の習得へ ⇒ 自尊感情

支援のはじまり

ママパパの心を守る

生まれて間もない赤ちゃんの世界は、ママの抱っこに包まれた世界

生まれて間もない赤ちゃんに伝わるものは、
「感情に彩られたママの情緒状態」（人生最初のコミュニケーション）

だから、ママパパのこころを安心・元気にする！

そのために、きこえない成人・青年との出会い

生後すぐから、コミュニケーションの開始！

～「ことば以前」と呼ばれる時期～

ママパパのきもちを表情や身振りにのせて、赤ちゃんに全身で伝えてください。
それは、目でわかる「意味」として、赤ちゃんの心に届きます。
それが、コミュニケーションのはじまりです。

手話があれば、レパートリーが広がります

◆たとえば、

ミルク　うんち　おふろ　ママ　パパ　おいしい　ねむい　おはよう

◆赤ちゃんのこころに吹き出しをつけてあげてください。

よかったね　うれしいね　おこってるの　おなかすいたの　すっきりしたね
びっくりしたね　こわかったの　はやく～　いやいやね　もっとほしいの？

◆赤ちゃんのこころに応えてあげてください。

すごい！　やったあ！　わかるんだ！　かしこいなあ～　だいじょうぶよ
どうしたの？　ごめんごめん　わかったよ　おしえてくれたの、ありがとう！

かかわりをとおして、ことばの「意味」に気づく
やりとりをとおして、文脈が生まれ、エピソードを共有
⇒「情緒的な応答性をもつ存在」を心の中に保てるようになる ＝ 愛着

ママはよろこんでくれる　パパならほめてくれる　応援してくれる

もっとも伝わるコミュニケーション手段が重要
息を吸うように入ってくる「ことば」
全部わかる「ことば」　→ 手話言語の意義

基本的な信頼感と自律性 ：
安心できる関係のなかで育まれる「だいじょうぶ」と「わかる」「できる」の感覚

愛着；人と人との間に生じる永続的な情緒的絆（きずな）

ZERO TO THREE　愛着形成のプロセス

誕生　わたしは安全　この世界は安心
この人（ママ）が安全をくれる　この人が安心をくれる
この人（ママ！）は、わたしの表現に応えてくれる
わたしの表現は待たれている、ママに喜んで受けとめられる
わたしとママは、いろんなやりとりができる、伝え合える
エピソードがいっぱい！
わたしの心の中には、ママがいる　パパがいる
3歳　ママ・パパの心の中にも、わたしがいる

愛着対象の内在化

乳幼児の手話獲得と保護者の手話習得

倉島渡先生のご講演（聴覚障害）から

「言語の形式が発達する背後には、意味の発達があり、これには親子の自然なやりとりをとおしてわかる体験を積み上げていることが欠かせない。そこに、手話がのっていくことによって、発達が保障される。ところが、きこえる親は手話ができないので、親子の関係を支援するためには、親への手話習得支援がやはり欠かせない。」

保護者の手話習得支援は必須

とはいえ、保護者が日本手話を獲得することは容易でなく、ましてや乳幼児に手話言語を教えることはできない

そのため、乳幼児がネイティブサイナーに出会い、手話言語の形式に自然にアプローチできる環境が必要

「こめっこ」の誕生　対面支援と動画配信＆DVD　⇒　効果が明らかに

ママパパは、ママパパの手話でOK！　とにかくやりとりを楽しでください。 大切なのは、手話言語に対するリスペクト

子どもの手話言語力が高まるにつれ、ママパパの手話がたとえ拙くても、意味を汲み取って理解してくれるようになる

<心理発達分野>研究の目的

発達早期に家族と共に手話言語のあふれる支援の場に出会 い、手話言語を自然獲得する子どもたちが、手話を習得しながら子育てを始める親のもとで成長するプロ セスを、複数の発達ラインから捉える縦断的研究を行う。

手話を獲得・習得して成長する子どもの発達を明らかにしたい。

★心理発達分野の研究は、早期支援活動と表裏一体

観察と聴き取り　実施中

毎回の活動をとおした気づきと情報の共有
保護者からの報告の共有
詳細な記録

発達検査　実施中

質問紙検査：理解・言語・コミュニケーション等にかかる項目は、手話での理解や表出、手話言語の発達に置き換えて実施
対面検査：基本的に手話で実施

一人ひとりの発達の道筋　←　性格(人格)検査　準備中

共通して認められる発達の道筋

手話言語を獲得・習得して育つ子どもの心理発達モデル

ご視聴
ありがとうございました。

手話は「文字」と どのように違うか

酒　井　邦　嘉

東京大学 THE UNIVERSITY OF TOKYO

220122

自然言語とは

- 自然言語には生得的な文法性（普遍文法）があり、乳幼児が獲得できる
- 単語の表現それ自体は任意（単なる連想記憶）で、自然言語とは言えない
- 単語の羅列も自然言語ではない
- 従って、「手話単語」の羅列である「手指日本語」は自然言語でない

文字とは何か？

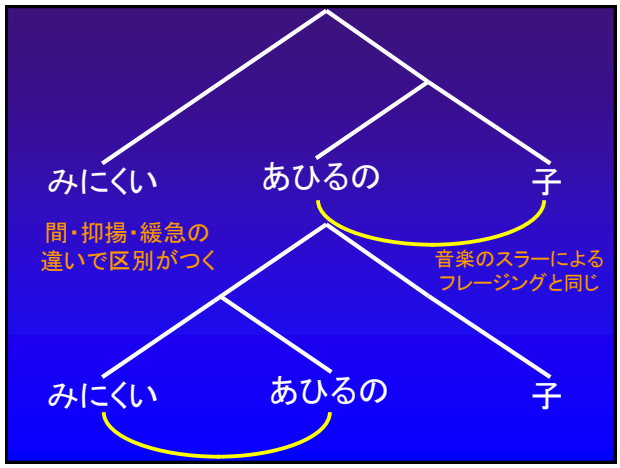
- 文字は談話や脳内の言葉を記すための道具で、人工的に発明されたもの（デザインの一種）
- 文字は、言葉を表す「記号」に過ぎない
- ハングルは、1446年に第4代朝鮮王の世宗（セジョン）が「訓民正音」（フンミンジョンウム）として公布　（ドラマ『根の深い木』がおすすめ）
- ハングル基本字の子音5字は発音器官や発音形を表し、母音3字は天・地・人を表す

文字の性質と誤解

- 表音文字や発音記号は、音符（♪）と同じ
- 文字から音声を復元できれば再生できる
- 文字では音声の抑揚を十分に表せない
- 表意文字（ideogram）は、数字や式と同じ
- 絵文字（pictogram）や標識は具体性を重視
- 「点字」は音声言語の文字を変換したもの
- 「指文字」も同様で、手話の代替ではない！
- 手話は点字のような「補助手段」ではない！

文字は自然言語なのか？

- 乳幼児が自然習得できる「文字」はない
- 乳幼児が言葉の代替で使える道具もない
- 自然言語の構造は単語同士の間・抑揚・緩急に現れるが、これらは記号（例：音楽用語）で表せても、文字には反映されない
- 自然言語の特性を持った文字は発明できるかもしれないが、言語の多様性を満たす「ユニバーサルデザイン」は、極めて難しい


みにくい
あひるの
子
間・抑揚・緩急の
違いで区別がつく
音楽のスラーによる
フレージングと同じ
みにくい
あひるの
子

酒井邦嘉
Sakai Kuniyoshi
チョムスキーと
言語脳科学
インターナショナル新書
〈文法中枢〉の存在を
脳科学がついに
実証した！
チョムスキー言語理論
の核心
中公新書　第18版
酒井邦嘉著
言語の脳科学
脳はどのようにことばを生みだすか
Language
Brain Science
究極の難問に挑む！
中公新書 1647
毎日出版文化賞
受賞！

2021年度 大阪府手話言語条例シンポジウム

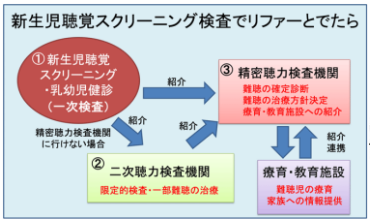
第II部 パネルディスカッション

「耳鼻咽喉科医」の視点から

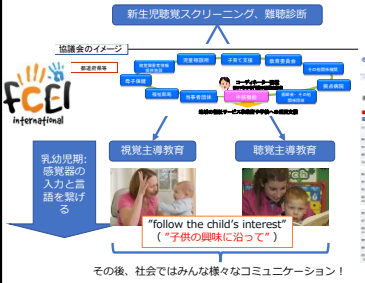
国立病院機構東京医療センター耳鼻咽喉科
南 修司郎

耳鼻科医は難聴診断後、確実に療育・教育施設へ繋げる！

一次検査（新生児聴覚スクリーニングおよび乳幼児健診）後の流れ



厚労省がイメージする協議会



難聴児の早期発見・早期療育推進のための基本方針

Family-Centered Early Intervention
聴覚障害児のための家族を中心とする早期介入

原則	日本語	
1	早期に、タイミングよく、公平に、支援につなげる	早期にかつ誰にも開かれたサービス
2	家族と支援チームのバランスのとれた連携	FCEIの実戦内容（何を）と実戦方法（どう）を各家庭と行って行くかに焦点
3	十分な情報提供とそれに基づく家族の選択、意思決定	
4	家族への社会的および精神的サポート	
5	家庭内での親と乳幼児の対話	
6	補聴機器や支援機器手法等を用いる	
7	専門性の高い療育者	提供者の資質とチームワークの重要性
8	多職種連携チーム支援	
9	進捗状況のモニタリング	常に発達評価に基づいて実践
10	プログラムのモニタリング	

原則４：家族への社会的および精神的サポート
（担当介入者に求められるもの）

1.公的な支援の枠組みと、民間の、あるいはプライベートな支援の枠組みとを共に活用する.

2.自然発生的な人と人の繋がりが家族の健康と幸福を支える事を理解する.

3.家族が自分たちのニーズや心配事などについて支援の枠組みから得られるものがあるかどうか見極められるよう支援する.

4.各家庭特有のニーズに合うサポートを選択的に受けられるよう、可能な選択肢は多くしておく.

5.ネットワーク構築のためには相互援助が前提であることを理解し、そのモデルとなるよう行動する.

6.家族とコミュニティー間の交流を仲介し、非公式ネットワークを強化する.

7.ろう児・聴覚障害児を持つ家庭同志の支援の輪に入れるように支援する.

8.ロールモデルとなる成人のろう者・聴覚障害者と家族との交流を促す.

9.ろう児・聴覚障害児の両親及び兄弟姉妹の幸福が促進されるよう社会的および情緒的支援をする。場合によっては心理カウンセリングの専門家を紹介する。子供の発育にとって、家族が満たされていることはとても重要である.

原則５：家庭内での親と乳幼児の対話
（担当介入者は家族が以下のことをできるように支援する）

1.毎日の日課、遊び、日常のやり取りから子供のコミュニケーション能力の発育を促進する.

2.家族との自然な触れ合いの中で、常に子供に豊かな言語刺激を与える.

3.子供の側からの働きかけに敏感に気づき、言語力及びコミュニケーション能力の発達を促進すると言われている関わり方を一貫して実践する.

4.子どもが多くのやり取りを経験し、積極的に参加する機会を作る.

5.家族間のやり取りに聴覚障害児も必ず入れる.

6.子どもの言語スキルを伸ばすために適した話し方のレベルで話す.
（例えば次の段階への伸び代に敏感に気づき、そこに合わせる）.

7.家族の希望があれば手話を学ぶ. Learn a sign language, if this is the family's choice.

原則６：補聴機器や支援機器手法等を用いる
（早期介入プログラムに求められるもの）

1.コミュニケーション方法が複数ある場合、家族が使えないものが無いようにする. 場合によっては支援プログラム間での調整が必要となる.

2.コミュニケーション方法に関する家族の選択を積極的にサポートする.

3.家族の協力を得て評価を行い、選択したコミュニケーション方法に変更や改善の必要が無いか見極める.

4.家族が選択したコミュニケーション方法に最も習熟した提供者に支援を担当させる. 例えば：
a. 視覚的言語を選んだ場合、母語手話者あるいはそれに近いレベルの手話を話せる療育者が、両親の手話習得を促し、子供に言語的インプットを与えコミュニケーション能力を育めるように計らう.
b. 音声言語を選んだ場合、レベルの高い専門的スキルと知識を持つ療育者が、子供の聴く力、言語力、コミュニケーションの発達を育むことができるように両親を支援する.

物井 明子先生、久保沢 寛先生への質問

- 健聴のお母さん、お父さんが、ご自身たちの手話能力が、子供の言語発達についていけず、より複雑な本を読んであげたり、より複雑な話をしてあげることが難しいという悩みを聞きました。どのようにアドバイスをしてあげるのが良いでしょうか？

原則７：専門性の高い療育者（早期介入プログラムに求められるもの）

1.聾児・聴覚障害児とその家族を支援する際に求められる中核の知識とスキルとは何かを定める.

2.専門性の高い療育者の基準を定め、療育者の評価と継続的な訓練により基準をクリアする知識と技能を担保する.

3.聾・聴覚障害の乳幼児を持つ家族の支援において高い専門性をもつ療育者とつながるよう支援する.

4.継続的な訓練や情報を提供することにより、療育者たちが聾児・聴覚障害児を持つ家庭のFCEIに必要な専門的な知識と技能レベルを維持できるように計らう.

5.療育者たちは療育的介入に関する理論や方法論についての知見をもち、それぞれ確立された療育方法に沿って支援にあたること.

6.療育者を監督、指導、直接観察して、サービス提供のパフォーマンスに関する具体的なフィードバックをする.

7.手話を習得中の家族には、母語（レベルの）手話話者で乳幼児家庭の指導にも経験豊富な人に言語モデルとして関わってもらうなどの配慮をする.

8.専門家同士による評価・反省の機会を設ける.

原則８：多職種連携チーム支援（早期介入チームに求められるもの）

1.専門分野を問わず各家庭の特有なニーズに合わせてメンバーの人選をし、学際的な構成で実践する.

2.チームのメンバー候補：両親・保護者、早期介入の知識と経験を持つ専門家、聾・聴覚障害児とその家族の支援についての知識と技能をもつ療育者（聾・聴覚障害の教師、言語病理学者など）、耳鼻科医、オーディオロジスト、サービスコーディネーター、成人ろう者・聴覚障害者（ロールモデル、あるいはメンターとして）、手話講師、ソーシャルワーカー・心理士、親の会などの家族サポートネットワークの代表者、など.

3.子供の必要に応じて、理学療法士、作業療法士、かかりつけ医、精神科医、神経科医、発達小児科医、聴覚や視覚障害者の教育専門家、など

4.聾・聴覚障害の成人と交流する機会を家族に提供する.
a. 聾・聴覚障害の大人はロールモデル、対談相手、そして家族にとってメンターの役割を果たし、言語経験を豊かにする情報やリソースを提供してくれる.
b. 文化や言語に配慮しながら聾・聴覚障害のコミュニティのメンバーをチームに加える.

河﨑 佳子先生への質問

- 難聴児の療育を行う上で、認められる発達の遅れが難聴に起因するのか、発達に影響を与える他の障害が合併しているのか、判断が難しいことが少なくありません。難聴児の全体的な発達・発育を観察し、発達障害の重複の有無を判断する上で発達検査は有用であると考えますが、検査は子どもの利益のために実施されるものでもあります。発達検査の結果をどのように活用するのが良いのでしょうか？

原則９：進捗状況のモニタリング

- FCEIは子供と家族の成果の定期的なモニタリングと評価をもとに実践される.

原則10：プログラムのモニタリング

- FCEIプログラムは療育者が最も効果的だとされる介入方法を遵守しているか評価し、全てのプログラム要素に品質保証モニターを設ける.

武居 渡先生への質問

- 音声言語の場合、LittlEARSのような聴性行動発達検査や、言語発達検査を用いて、音声言語の伸びについては定期的に確認が行われます。手話言語の伸びについても定期的に確認し、問題がある場合は適切な介入が求められると思います。手話言語の伸びについて適切な確認方法はどうすれば良いでしょうか？

2021年度　大阪府手話言語条例シンポジウム
「手話言語を獲得・習得する子どもの力研究プロジェクト
～生涯発達を見据えて　ZERO to THREEに大切なこと～」

指定討論②

「言語学・バイリンガル教育」の視点から

2022年1月22日　オンライン

古石篤子
akak@sfc.keio.ac.jp

今日のお話の流れ

- 1. はじめに:「しゅわまる」誕生！
- 2. 言語学の視点から
- 3. バイリンガル教育の視点から
- 4.「こめっこ」活動の広がりと「ひだまり・MOE」
- 5. おわりに:きこえない子どもの言語権

※「きこえない子ども」

- 河﨑先生の「きこえない・きこえにくい子ども」と指す対象は同じ。
- 音声言語の聞き取りが無理なく自然にはできない子どものことを指す。
- 人工内耳や補聴器装用の子どもも含める。

1. はじめに:「しゅわまる」誕生！

- 2020年4月～（2021年度は2年目）

神奈川県聴覚障がい児等手話言語獲得支援事業

  - 予算:約535万円（新型コロナの影響で活動縮小に伴い減額）
  - 神奈川県聴覚障害者連盟が受託

- 「しゅわまる」と命名（2020年8月）
  - 代表:早瀬憲太郎
  - 対象:就学前のきこえない子ども
  - 交流会:月2回（第2・4土曜日）開催
  - 「しゅわまるタイム」+「しゅわサロン」
- 第1回報告会:2022年3月26日（土）開催予定

2021.12.25（土）
クリスマス会

「しゅわまる」誕生秘話！

- 2019年6月8日　神奈川県ろう教育研究集会
  河﨑佳子先生のご講演「きこえない・きこえにくい子どもたちの成長と手話」

★臨床心理士の経験から、きこえない青年や成人の困難や苦悩

↓

動かす！

- 神奈川県子ども未来局地域福祉課職員、神奈川県議会議員、藤沢市議会議員等

- 河﨑先生の「話題提供」から
  - 「親子で手話に出会って、愛着形成」
  - 手話言語の意義
    - もっとも伝わるコミュニケーション手段が重要
      息を吸うように入ってくる「ことば」
      全部わかる「ことば」
- 木島照夫（2020）（『手話で育つ豊かな世界』から p.101）
  - 発達早期から手話で育ってきた子たち → 書記日本語力や抽象的思考力をしっかりと身につけていく子どもたちが多い。（その土台は手話を駆使して培われてきたさまざまな力）
  - 親の障害認識 → 子ども自身の自己肯定感
  - 100%見てわかる言語である手話 → 安心して世界と関わり理解することを促す → 年齢に応じた認知、概念、知識、情緒、対人関係・社会性が可能になる。

2. 言語学の視点から

（1） 第一言語（L1）獲得には適した年齢がある。

(2)【L1獲得阻害のリスク1】 どの言語もネイティブ なみの流暢さで使うことはできなくなる。

(3)【L1獲得阻害のリスク2】 言語能力と密接に関わる認知能力の発達の遅れや混乱を招く。

※第一言語（L1）：最初に身につけることば

（1） 第一言語（L1）獲得には適した年齢がある。

- 言語獲得の適期： 0～3、4歳ぐらい
  ZERO to THREE！
- 言語：音声言語、手話言語
- 武居先生の「話題提供」から
  - 聴児の音声言語獲得過程と聾児の手話言語獲得過程はきわめて類似
    例）
    - 喃語
    - 語彙の発達
    - 動詞の語形変化

＜言語獲得の歩み＞

（岡本夏木『子どもとことば』1982より）

- 誕生 — クーイング
- 「ことばの胎生期」 — 喃語（半年～）・手指喃語
  — 指さし（9ヶ月～1歳3, 4月）
- 1歳前後 — 初語！
- 「謎の時代」
  — 2語発話（1歳6ヶ月～8ヶ月）
- 満2歳前後 — 急激な組織的な言語獲得！

子どもの言語獲得はクリエイティブ！

- 単に受け身で真似するだけのものではない。
- 自分でことばを頼りに世界をカテゴリー化（分類）
  例）「ニャンニャン」（岡本夏木『子どもとことば』）
- ことばに自分独自の意味づけ
- クリエイティブで知的な活動

★「言語の発達を保障するには、言語面だけでなく、全人的な関わりが必要」（武居）

(2)【L1獲得阻害のリスク1】

- どの言語もネイティブなみの流暢さで使うことはできなくなる。

＜習得年齢による習得到達度＞

★ASLサイナー30名（全員30年以上ASLを日常的に使用）対象

- ネイティブ・サイナー（0歳～）
  - 生後すぐにろう者の親から学ぶ。加えて、4～6歳からろう学校でろう児仲間からも学ぶ。
- 早期学習者（4～6歳以降）
  - ろう学校入学後にろう児仲間から学ぶ。
- 遅延学習者（12歳以降）
  - 12歳以降にろう学校に入学し、仲間や他の友人、配偶者から学ぶ。

E. L. ニューポート （1990）

図１　ＡＳＬ基本的語順の習得（Newport, 1990 より作成）

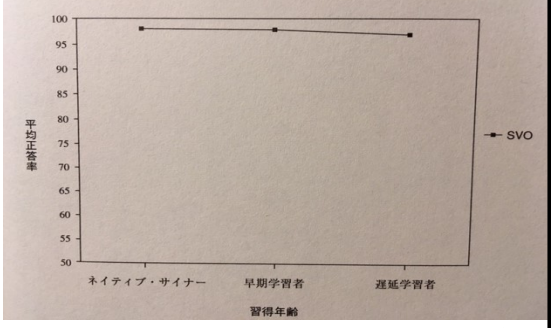
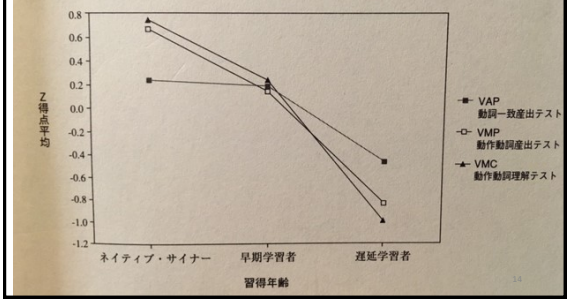


図２　ＡＳＬ形態素の習得（Newport, 1990 より作成）



(3)【L1獲得阻害のリスク2】

- 言語能力と密接に関わる認知能力の発達の遅れや混乱を招く。

- *Cf.* 世界保健機関（WHO）は令和3年3月に「World Report on Hearing」を発表し、難聴は聴覚やコミュニケーションに影響を与えるだけでなく、言語、認知機能、精神状態、人間関係、教育、雇用、社会的孤立等にも幅広く影響を与えうると指摘した。

（厚生労働省「難聴児の早期発見・早期療育推進のための基本方針（案）」p.1[注1]に引用）

3. バイリンガル教育の視点から

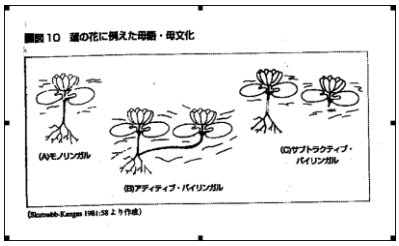
- バイリンガルのメリット
  - ろう児は手話を獲得し、次いで音声言語の読み書きを学び、おそらくはその音声利用もできるようになることでバイリンガルになる。バイリンガルであることは、認知的、社会的、学習的分野でろう児に大きな利益をもたらしてくれる。
  - 2つあるいは3つの言語を高度に習得した人は成長してからずっと、問題解決においてより創造的に思考し、精神的な柔軟度を増し、認知的な安定性を維持することが確実だ。

（ハンフリーズ、他、p.7）

  - 多言語環境へのすぐれた適応能力

バイリンガル教育理論の観点から

- L1の重要性



→ 母語・母文化教育の必要性

- 口話主義の時代、多くの教育者によって指摘され、そしてうやむやにされてきた事実がある。それは、子どもたちの約1割を占めるろうの親をもつろう児たちのほうが、読み書き能力や学力において、他の子どもたちよりも優秀な成績を納めることが多いということだ。」

（市田泰弘 2003, p.29）

- ヨーロッパや北米の先行研究では、通常、親がろう者である方が、聴者であるよりも、子どもの読み書きそのほかの学力がより優れるという結果が出ている（略）。一方、スウェーデンのI.アールグレン（1982）は、幼児が就学前に母語手話を覚えれば、親がろう者であってもなくても、ろう児の発達に差は見られなかったという。」

（J. カミンズ 2003, p.135-136）

4.「こめっこ」活動の広がりと「ひだまり・MOE」

- こめっこ　0～6才　2017年6月17日～
- べびこめ（BABY こめっこ）　2018年4月～
  - 0～3才（ベビー＆トドラー）
- ひだまり・MOE（相談支援事業）2018年4月～
- もあこめ　6才～　2019年4月～
- ほうこめ　3～6才　2020年～

4.「こめっこ」活動の広がりと「ひだまり・MOE」

- こめっこ　0～6才　2017年6月17日～
- べびこめ（BABY こめっこ）　2018年4月～
  - 0～3才（ベビー＆トドラー）
- ひだまり・MOE（相談支援事業）2018年4月～
- もあこめ　6才～　2019年4月～
- ほうこめ　3～6才　2020年～

新生児聴覚スクリーニング後のケアと情報

～0歳からの切れ目ない発達を保障するために～

- 家族、特に母親の心理的ケアの必要性
  - 「暗黒の3ヶ月」「心理的な港」（中尾）
- 中立的で網羅的な情報提供の必要性
- 具体的な選択肢提供の必要性
- 財政的補助の必要性

5. おわりに：きこえない子どもの言語権

◆ 言語権

「自己もしくは自己の属する言語集団が、使用したいと望む言語を使用して、社会生活を営むことを誰からも妨げられない権利」

（鈴木、2000）

◆きこえない子どもの言語権

- 成長した後、子ども自身が選択できるように
- 選択肢が必要、選択時期が遅れても不利にならないように0～3歳の環境整備
  - 「（同じ聴力でも）脳の特性は１人ひとり違う」（中澤, p.56）
  - 軽中度難聴児、人工内耳装用児もセイフティネットとして

Q：武居先生におたずね

- 「こめっこ」で培われた手話の力は、第一言語として、第二言語としての日本語を伸ばすのに十分な強さがあるでしょうか。
  （デフファミリーの子どもの第一言語としての手話の力とは、インプットの量から見ても異なると思うので）

引用文献

★ご静聴・ご静視ありがとうございました。

- 市田泰弘（2003）「ろう者のバイリンガリズム」『言語』8月号、pp.22-33.
- 岡本夏木（1982）『子どもとことば』岩波新書.
- 木島照夫（2020）「手話と日本語はどのように獲得されるか？」『手話で育つ豊かな世界ーその子らしさを実現する支援・教育を求めてー』全国早期支援研究協議会、pp.93-102.
- 厚生労働省（2021）「難聴児の早期発見・早期療養推進のための基本方針（案）」https://public-comment.e-gov.go.jp/servlet/PcmFileDownload?seqNo=0000228676
- 鈴木敏和（2000）『言語権の構造ー英米法圏を中心として』成文堂.
- 中澤　操（2020）「シンポジウム討議」『2019年度大阪府手話言語条例シンポジウム』、p.56.
- 中島和子（1998）『バイリンガル教育の方法ー地球時代の日本人育成を目指して』アルク.
- ――　（2010）『マルチリンガル教育への招待』ひつじ書房.
- ハンフリーズ、T. 他（2014）「ろう児の言語獲得を保障する一言語学者ができることー」（学校法人明晴学園訳）*Language*, vol.90, no.2, June 2014, pp.e31-e52.
- Newport, E. L. (1990) "Maturational Constraints on Language Learning", in *Cognitive Science*, 14, pp.11-28.

2021年度大阪府手話言語条例シンポジウム
「手話言語を獲得・習得する子どもの力研究プロジェクト
～生涯発達を見据えて　ZERO to THREEに大切なこと～

「手話言語教育」の視点から

２０２２年１月２２日（土）

関西学院大学　手話言語研究センター　研究特別任期制助教
関西デフ・フリースクール「しゅわっち」代表
前川和美

自己紹介

- 常に手話があり、身近にロールモデルがいた
  - ろう学校・地域の学校・難聴学級を経験
  - 渡米先でのカルチャーショック
  - 関西デフ・フリースクール「しゅわっち」活動
- 現在、関西学院大学で「日本手話」および「手話言語学」を担当
  手話言語研究センターにおいて
  「ろう児をもつ親への手話指導」に関する研究

「しゅわっち」理念

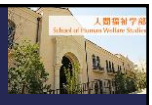
私たち「しゅわっち」は、ろう児がろう者としての誇りをもって健全に育つよう、バイリンガル(日本手話-書記日本語)・バイカルチュラル(ろう文化-聴文化) ろう教育が必要であると考えます。

そのために、ろう児の成人モデルとなるろう者スタッフを中心に、日本手話で考え、話し、学習する環境を提供します。

また、ろう児に関わる様々な情報を、多くの市民に伝えていく活動をします。

これらをもって、子どもたち一人ひとりの可能性を伸ばし、 他人を思いやり、共感する心を持てる「人間教育」を理念とします。

関西学院大学「日本手話Ⅰ～Ⅳ」



- 第二言語（選択必修）科目として2008年4月に導入。
  （他に、英語コミュニケーション・独語・仏語・朝鮮語・中国語・西語がある）＊第一言語科目は「英語」
- 教養科目などではなく「言語科目」として導入されたという事は、

文部科学省が日本手話を言語として認可した
という事。

手話言語研究センター

- 香港中文大学「手話言語学・ろう者学研究センター」からの呼びかけが契機となる
- 2015年、「特定プロジェクト研究」として発足

手話言語研究センター

事業目的

- 手話言語に関する科学的・学術的研究を行う
- 様々な事業を通して、手話の言語としての地位を確立する
- 手話に対する正しい理解と社会的認知度を高める

研究分野

- 音声言語と手話言語を主題とした学際的・領域横断的研究
- 手話言語を主題とした言語学的研究
- 手話言語教育を主題としたバイリンガル教育に関わる研究

ろう児をもつ親の手話学習について

- ろう教育に言語としての**手話が取り入れられる**ようになり、聴こえる親自身も、**日本手話学習の場を求める**ようになった

ろう児の人権救済申立(2003)

しかし・・

- 手話通訳者養成のためにデザインされた講座が多い
- 日常的に手話を必要とする親のニーズに**適していない**
- 講座で使用する手話のタイプに**一貫性がない**

ナチュラル・アプローチ（NA）

- 目標言語（手話で手話を教える）だけで指導
- 入門期から初級段階に特に有効的
- 成人ろう者が指導を行い、社会・文化的視点を加味した指導内容
- 使用言語や指導法に**一貫性がある**
- ろう児をもつ聴者の親に対する手話指導に**有効である**と予想される

提唱者：Krashen&Terrell（1982,1991）

ナチュラル・アプローチ（NA）

提唱者：Krashen&Terrell（1982,1991）

クラッシェンの理論モデル

- 1，習得/学習説
- 2，自然順序説
- 3，モニター仮説
- 4，インプット仮説
- 5，情意フィルター仮説

ナチュラルアプローチの基本原理

- 1，NAの目標は伝達技能を身につけること
- 2，理解は発話に先行する
- 3，発話は自然に表出する
- 4，習得活動が中心である
- 5，情意フィルターを低くする

自然な習得・自然な発話、コミュニケーション能力

「ろう児をもつ親への手話指導に関する研究」前川（2020）

【対象】聴覚特別支援学校幼稚部（３～４歳児）に通うろう児をもつ聴者の親６名

対象者	ろう児の年齢	きょうだい	出生順位	家庭でのコミュニケーション	手話学習歴
Aさん	４歳	1人	1	口話・身振り・手話	３年
Bさん	３歳	2人	1	口話・身振り	（無記載）
Cさん	４歳	2人	2	口話・身振り・手話 ベビーサイン	約３年
Dさん	３歳	2人	2	口話・手話	（無記載）
Eさん	３歳	3人	1	口話	数回
Fさん	４歳	2人	1	口話・手話	（無記載）

講座の理解度

対象者	１回目	２回目	３回目	４回目
Aさん	4	4	5	5
Bさん	5	5	5	―
Cさん	5	5	―	5
Dさん	5	5	―	―
Eさん	4	4	4	4
Fさん	5	5	5	5

NA法による指導が可能であるということが確認できた

手話やろう者に対する印象の変化

●Aさん

第１回目「手話だけの世界に戸惑った」

↓

第２・３回目「知っている表出以外教えてもらった」

↓

第４回目「手話をもっと学びたい」

手話学習歴３年であり、地域の手話講座を受講経験があるのにもかかわらず、手話だけの世界に戸惑っていた。最終的に「もっと学びたい！」と意欲的さが見られた。

手話やろう者に対する印象の変化（手話を使用していない家庭）

●Bさん

１回目）手話を勉強してみようという気になった

２回目）無記載

３回目）表情豊かでわかりやすい

４回目）欠席

●Eさん

１回目）表情や反応をはっきりした方がわかりやすいと思った

２回目）地域によって手話が違う

３回目）表現・表情が大きくわかりやすかった。

４回目）表現を大きくわかりやすくすることで伝わりやすいのかな？性格的に恥ずかしいので頑張りたい。

手話が身近なものになり、
手話学習のモチベーションが上がった

手話やろう者に対する印象の変化

●Cさん

１回目）表情や視線が必要だということを再認識した

２回目）無記載

３回目）欠席

４回目）視線の向き、仕草で伝えることの大切さを改めて感じた

●Dさん

１回目）目を合わせて理解することが大事だということを再認識した

２回目）無記載

３回目）欠席

４回目）欠席

異文化の再認識

武居渡先生「言語獲得分野」から

- ろうの子どもの言語発達について（/車/）
  - 甥姪の経験（/花/、/ショベルカー/）
  - 質問１：CODA、GODA、SODAも類似した手話言語の発達は見られるのでしょうか？
- 「指差し」について
  - ろう児は「その場にないもの」に対しても指差しで表現
  - →言語としての指差しの獲得
  - 成人聴者の日本手話習得：指差しを言語の一部として認識できていない？

武居渡先生「言語獲得分野」から

- 屈折動詞（一致動詞）
  - ロールモデルの存在が重要

質問２：過剰般化について
- 絵本/驚く/^^^　それぞれの猫が驚いている
- CLの獲得との関連性はあるのでしょうか？
- また、エラーは修正すべきでしょうか？

- 「わかる経験」
  - 私の親について

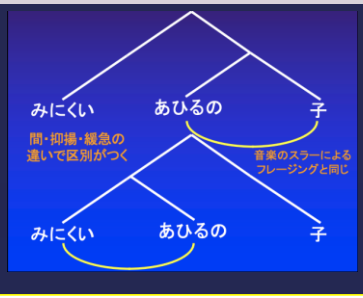
河﨑佳子先生「心理発達（人格形成）の視点から」

質問１：音声日本語に自然に手話をのせていい、ということ
- これまでに事例があれば教えてください

質問２：手話言語に対するリスペクト
- デフ・スペースの環境はありますか？

- ろう児にとってのロールモデルの重要性
  - ネイティブサイナーであるに加え、指導の知識、言語学の知識も重要
  - 注意すべきこと（喃語に合わせない）

酒井邦嘉先生「言語脳科学の視点から」



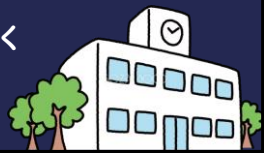
間・抑揚・緩急の違いで区別がつく

/私/　/妹/　/学校/　/行く/

①私と妹が、学校へ行く

②私が、妹の学校へ行く

③私の妹が、学校へ行く



①私と妹が、学校へ行く

/私/　/妹/　/学校/　/行く/

うなずき　うなずき

②私が、妹の学校へ行く

/私/　/妹/　/学校/　/行く/

うなずき

③私の妹が、学校へ行く

/私/　/妹/　/学校/　/行く/

うなずき

NPOこめっこの活動内容

- はじまりのあいさつ
- スタッフ紹介 名前よび
- こめっこぱんぱん 手話ぱんぱん
- あそび
- 絵本よみ
- 手話劇
- ぎゅっとものがたり
- おかたづけぱんぱん
- おわりのあいさつ

まとめ

- 音声日本語とまったく別モノである自然な言語、「日本手話」の存在をおざなりにしない
  ろう者のように手話ができなくても、限りなく近づくことができる
- ろう者の気持ちに寄り添い、ろう文化も尊重してほしい
- 成人ろう者のロールモデルを見つけよう！

「こめっこ」は素晴らしい環境が揃っている

ありがとうございました

前川和美
maegawa-center@kwansei.ac.jp

【資料-2　参加状況】

大阪府手話言語条例シンポジウム　参加者

参加申込者数	９２０人（他関係者・スタッフ４５人）
第Ⅱ部 参加数	５７４人（途中入退出者含む）

■参加者所属内訳

行政機関（福祉部局）	５０人	手話通訳関連団体 （全通研・手話サークルなど）	３０３人
行政機関（教育部局）	３人	言語聴覚士協会	１人
行政機関（その他）	８人	大学や研究所	５４人
学校関係	１５３人	当事者(保護者)	４１人
医療関係	１７人	マスコミ機関	４人
福祉関係	５５人	企業	２人
児童福祉関係（デイサービス・療育教育等）	５４人	その他	７５人
当事者団体 （ろうあ連盟・聴覚障害者協会等）	６４人	特になし	３６人

【資料-2　アンケート報告】

〇回答状況

申込者数	920 人
回答数	413 人

（回収率　約４５％）

〇アンケート結果

１．NPO こめっこの活動について	
とても関心をもった	３６５
ある程度関心をもった	４８
あまり関心をもたなかった	０

２．子どもの手話言語を獲得する機会の確保を図る必要性が	
よくわかった	３３７
ある程度わかった	５２
あまりわからなかった	０
既に理解していた	２４

３．保護者の手話習得支援が、子どもの成長にとって大切であることが	
よくわかった	３５２
ある程度わかった	３５
あまりわからなかった	０
既に理解していた	２６

４．情緒的な発達とわかる体験を積み重ねるために、０～３歳の間に手話に出会うことの大切さが	
よくわかった	３５９
ある程度わかった	３７
あまりわからなかった	０
既に理解していた	１７

５．手話が言語であることを初めて知った	
はい	６
いいえ（既に知っていた）	４０７

６．５で「はい」と答えた方にお尋ねします。 手話が言語（自然言語）であることが	
よくわかった	５
ある程度わかった	１
あまりわからなかった	０

７．ご所属、職種等について、教えてください（複数回答可）	
行政関係	４４
教育関係（聴覚支援学校、難聴学級）	７３
教育関係（上記以外）	３２
医療関係	１０
児童福祉関係（デイサービス・療育教育等）	３０
福祉関係（上記以外）	３４
当事者団体（ろうあ連盟・聴覚障害者協会等）	２１
手話通訳関連団体（全通研・手話サークル等）	２１８
大学や研究所	２７
保護者やご家族	２９
その他	２６

８．シンポジウム開催をどこでお知りになりましたか（複数回答可）	
チラシ	１７０
メール（NPO こめっこから）	１０２
メール（NPO こめっこ以外）	２７
ホームページ（NPO こめっこ）	６０
ホームページ（NPO こめっこ以外）	２
新聞・広報など	２４
その他	７７

９．８の質問に、「メール（NPO こめっこ以外）」「ホームページ（NPO こめっこ以外）」「新聞・広報など」「その他」　と回答された方は、よろしければ具体的に教えてください
［ メール（NPO こめっこ以外） ］ 主な回答 ： 手話通訳関係団体、子ども ST の会　など **［ ホームページ（NPO こめっこ以外） ］** 主な回答 ： 難聴児支援教材研究会 **［ 新聞・広報など ］** 主な回答 ： 日本聴力障害新聞、日本通訳士協会「翼」同封チラシ　など **［ その他 ］** 主な回答 ： Twitter、Facebook、学校での配布チラシや掲示ポスター　など

１０．大阪府手話言語条例シンポジウムに参加されるのは何回目ですか（2018 年から継続して行っています）	
初めて	２６８
２回目	１１９
３回目	１６
４回目	１０

１１．今回のシンポジウムをご視聴くださった感想など、自由にお書きください。

［自由記述部分については、 今回もたくさんのご意見･ご感想をお寄せいただきました。紙面の都合上、遠隔実施に関する感想、企画運営や情報保障に関するご意見、開催に対する感謝のお言葉等については割愛させていただいております。貴重なご意見やアドバイスを、今後の開催に反映してまいります。心づよい励ましをいただき、誠にありがとうございました。］

〇どの方も内容が専門的で難しかったですが、「自然言語」とは何かがハッキリわかったのは、大きな収穫でした。次も期待しています。

〇ろう教育関連のシンポジウムには何度か参加しました。就学前の活動を具体的に知る機会になり、とても刺激を受けました。

〇関心高い内容でした。全ての人が参加できるのが良かった。今後も継続的に続けていただきたいです。

〇聴覚支援学校で、教育相談担当です。今日の話をまた、相談活動にいかしていきます。

〇仕事柄、ろう児の手話喃語を見る機会があり、興味深く成長を見守っています。とても表情豊かで愛らしく、生き生きしています。

〇聞こえない子どもにとって0～3才までの第一言語習得の大切さを理論的に学ぶことができました。【こめっこ】の活動はすごいー！

〇きこえない子どもたちの生涯発達の未来が、どんどん開拓、拡大していくことがとても嬉しく、可能性が広がっていくことが楽しみです

〇様々分野からのご意見があり、多角的認識捉える事ができました。

〇このような企画が日本中に広まったらよいと思います。

〇知らない世界をこのズームという機会を得て遠方でも学べた

〇こめっこの各クラスごとの活動の様子が分かりました。母語である手話を自然と獲得するための母子ともに早い時期からのコミュニケーションの大切さもわかりました。専門家の先生方との協力のもと進められていることもすばらしいと思いました。大学の先生のお話は難しい

話でしたが分かる範囲で理解できたと思います。

〇こめっこと研究機関が連携することで、目的、活動内容が確固たるものになる。その理念に基づいてこめっこの活動がある。その理念をスタッフの皆さんが共有し、その理念のもとに様々な活動を展開しているから、魅力ある活動につながるのだろう。いろいろ学ばせていただきました。

〇こめっこの活動内容や親子への支援について学ぶことができました。子供が手話を自然に獲得するための支援が広まってほしいと思いました。

〇手話の初期教育の大切さが分かった。大学時代言語学を学んだので懐かしく学びなおしたいと思った。

〇保護者の不安を常にサポートできるシステムの広がりを強く願う。

〇各専門分野の話は、科学的医学的な立場から、データなどに基づいてあったが、やはり直接ろう児にかかわり、またこめっこの関係者の言葉は温かみがあった。ろう児は、人工内耳をつけていても手話を獲得することは必要、またろう児を受け入れてほしいという言葉は、心に残った。

〇こめっこの活動の様子がよく分かり、年齢別のグループ活動も素晴らしいと思った。専門家の話は難しかったけど、発達や言語獲得の研究も必要であると分かりました。

〇0〜3 才の期間が、第一言語獲得に大切であり、こめっこの活動が大きな役割を果たしていることがわかった。

〇今回、こめっこついてはじめて知りました。早期から親子支援を行う場の必要性を改めて感じました。

〇初めて参加しましたが、人工内耳と手話について間違った意見を周囲で聞くことが多かったので、こういうシンポジウムを通していろんな知識がある専門家の方からきちんとした見解を知ることができてとてもよかったです。
時間の関係もあり、もっと深く知りたいこともありましたが、通訳士さんや字幕、画面の切り替えなどもとてもスムーズで見やすかったです。
また、こめっこさんのことは以前から知っていましたが、なかなか地方に住んでいると調べてもどうせ活動には参加できないし…とか、手話を学びたい，もっと上達したいのに…と思って諦

めているところもありましたが、具体的に手話パンパンやしゅわっちリズムなどの情報も知ることができたことも嬉しかったです。
手話を子供と親が一緒に学べる環境はまだまだ少ないですが、こうやって活動していただけることで手話を学ぶきかいやきっかけになると思います。

〇最新の脳科学、言語学など、各専門家の方の話を聞くことができてありがたく思いました。Zoom 参加がありがたかったです。

〇大阪や神奈川で 0 才から 2 才の言語獲得の時期を大切に考えながら取り組むが進んでいること、素晴らしいと思いました。乳幼児期に専門の相談支援を受け、選択できる環境が全国どこに住んでいても保障されるようになると良いと思います。

〇とても興味深い内容で、やはり手話に早期に出合う大切さを実感しました。前職はろう児の通う放デイで児童指導員をしていました。子どもたちの苦しさも保護者の辛さも聞いているからこそ、こめっこのような場所が増えていくことを願います。いつか見学に行きたいです。
前川さんのお話の時に読み取り通訳が映ったのだけ、少し気になりました。

〇聞こえない子供の言語獲得には、「こめっこ」のやり方はとても良いと思います。将来、聴こえる人と共に生きる社会を築ける人に育つと思います。

〇最近所属する手話サークルに難聴だと診断された子供さんを持つ方の入会希望があってどのように接したら良いのかと思っていたところでした。出来るだけ手話を親子で学べる環境にしてあげたいと思いました。

〇聴こえない子を持つ親（聴こえる）の支援について、まさしく今取り組んでいる内容だったので、とても為になりました。

〇難聴児の第一言語を手話にする（＝0〜3 歳の間に出来るだけ手話に多く触れさせる）ことで、100%解る体験を積み上げることがその後の人生を豊かにするということが先生方のお話でよくわかりました。
今回、こめっこの活動も初めて知りました。全国にこのような素晴らしい団体が設立されるといいなと思います。

〇5 歳の息子が人工内耳装用者で、親は聴者、子どもとのコミュニケーションは主に手話です。大阪に住んでいたらぜひこめっこに参加したいと思いました。現在、神奈川県のしゅわまるに参加していますが、こめっこのようにこれからどんどん活動が充実していくといいなと思

います。

〇事前配信でしっかり情報を得た上で参加できたのが良かった。私は 3 年前まで岡山聾学校に勤務しておりました。その際、河﨑先生御来校時は校長室まで押しかけ質問したりしました。この活動を通して画面を通してですがお会いすることが出来て良かったです。武居先生とは全日聾研高岡大会以来です。そして司会の久保沢様とは大阪ろう教育集いの分科会がご一緒でした。パワフルさは変わらないですね。今、私は福岡高等聴覚特別支援学校に勤務しております。物井様が研修会で来られた時のことを思い出されます。画面を通して皆様のご活躍が福岡にいる我々にも勇気を与えて貰えます。高等教育の立場から頑張って行こうと明日からの糧にします。

〇以前保育園に勤めていました。手話に興味を持ち勉強したことがありました。そして保育園で聾児(0 歳児)に出会い、手話を再度学び始めました。乳児相手なので、生活や遊びに必要な簡単な単語を中心に主に独学で学んできました。
今は聴覚障害児の放課後デイサービスで働いています(幼稚部対象)。今回のお話を聞いていて、聞こえる聞こえないに関わらず、やはり 0〜3 歳時期は、近くにいる大人との愛着関係、また、自分はそのままでいい、という自己肯定感を育むことが大切だということを再確認できました。私は、まだまだ手話を教えてもらいたい方の立場なのですが、早く習得して、手話で会話したり会話する姿を子ども達に見てもらいたいと思っています。

〇こめっこのような活動が全国的に行われると良いと思った。

〇幅広い専門家の意見を聞くことが出来、大変興味深かった。言語条例を基にこのような取り組みが出来ることは素晴らしい。地域でも言語条例で何が出来るか取り組みを深めたい。

〇自分自身の、言語観、価値観などについて、改めて考える機会となりました。私自身、手話を使うことの大切さは感じていても、ネイティブスピーカーとの出会いの場の提供や、手話を使う子ども集団の保障など、必要と思いながら出来ていない事ばかりです。地元のろう者と繋がり、できることを一つずつ行っていきたいです。 コロナ禍で、できない事ばかりに目が向きがちな今、このような学びの機会を作っていただき感謝します。

〇聞こえない子どもが手話言語を獲得することの大切さがよく分かった

〇聴覚障害や手話言語に関心はありましたが、これまで学ぶ機会を持つことが出来ていなかったため、大変貴重な機会でした。今後も学びを深め、支援の場を提供できるようになりた

いと思いました。

〇ろうの子がいる親の立場で視聴しました。こめっこの活動に、そしていろんな立場の人が集まり聞こえない・聞こえにくい子が手話言語を獲得するために必要なことを提言するシンポジウムを開催してくださったことに感動しました。聞こえない子たちが言語獲得をするために総力をあげて支援しよう、子どもだけでなくその家族ごと支えていこうと、多くの人が考えてくださっていることがとても嬉しいです。まだまだ地方によっては、手話を選択して育てることが困難な状況にあります。毎日の子育ての中で今すぐにでも手話が必要なのに、子を抱えて手話を学ぶ場がありません。また子どもが日常的に手話に触れる＝ろう者に会う場もありません。
こめっこの活動が全国へと広がっていき、こめっこを支える皆さんの考え方がどの地域でも当たり前のようになっていくことを願っています。

〇0から3歳までに子どもがわかる言語で習得することの大切さがわかりました。母語の習得の大切さを感じました。

〇聞こえない・聞こえにくい子ども(0〜3歳児)に合った手話言語の獲得の重要性が改めてよくわかりました。自分がわかっているのか、わからないのかに気づくこと、またわかりたいという気持ちを持つことの大切さも納得できました。手指手話が自然言語ではないということも自分の手話学習を振り返って実感できました。ナチュラルアプローチでの手話習得法に興味を持ちました。手話を使ってろう者を認める、尊重するということをこれからも大事にしていきたいです。

〇聞こえない、聞こえにくい人にとって、手話はわかりやすく伝えやすい(理解できて伝えられる)言語であると思います。この言語(手話)を土台にして、その先の学習言語が育っていくことを考えると、手話でわかった、伝わった経験がとても大切であることを再認識しました。

〇活動を始められてから、こめっこ参加者の変化についてお話を伺い、大切な事が何かがよくわかりました。しゅわぱんぱんや手話があふれる日常になるといいなーと思います。「1・1・3」のリズムが良いと知り、私たちの活動の中にも活かしていきたいと思います。今すぐできそうな事をたくさん知り、学べました。今後も活動報告や、課題、学びを共有し、理解を一層深めていきたいです。

〇今、現在、保育教諭として勤めていますが、4 月から児童デイの児童発達支援管理責任者として働きます。色々な障がいをもつ子ども達が通所してくるにあたり、ろう児だけでなく他の子ども達の関わり方にも共通すると感じました。今後も、楽しく手話を取り入れながら療育に力をそそいでいきます。

〇子どもの耳が聞こえないとわかった時に、その親に適切な情報提供をすることの大切さがとてもよくわかりました。

〇大阪は人材・環境・財源・組織面等々充実されてて良いな！と思いました。

〇知識として、発達、心理等の専門家の見解・考察が聴けて良かった。

〇保護者支援の方法、0歳児から手話環境を提供する方法などとても参考になりました。

〇こめっこの活動は東京都聴覚障害者大会の時から興味がありました。日本でいきていくためにはバイリンガルである事が求められるとのお話は納得できるし、その為にも第一言語の獲得が重要だと再認識しました。

〇登壇者の先生方も大変興味深い研究者ばかりで、勉強になった。ただ、もう少し時間があって、深掘りするお話しが聞けたら！とも思った。こめっこ が公立の学校に！とのコメント。本当にそうなって欲しいと思った。こめっこ の行っている難聴児&親に対するアプローチが日本での難聴児教育のスタンダードになって欲しいと思います。

〇乳幼児期に自分の気持ちをわかってもらえるという体験はとても重要なことであり、ろう児にとってその手段が手話であるということがよくわかりました。また、今後の知識や日本語の獲得にも、最初に母語として手話を習得することは大事なのだと思いました。

〇内容の濃いシンポジウムだった。ろう児の文字言語獲得の過程に興味がある。

〇事前の配信のみの参加となりましたが、短い時間の中にも重要なポイントが散りばめられており、手話に限らず、言葉の発達、心の発達のことは子どもができる前に学べるとよいのかなと思いました。広く貴団体の活動が知られることを願っています。

〇12歳のろう児の母親です。聴覚障害があるとわかっても命が助かったからなんとかなる！と前向きに捉えました。でも聾者と出会ったことがなかったので、きこえないとはどういう事なのか、どう接したら良いのかわからず困りました。ろう学校の先生からの情報が頼りでした。今回の様なイベントや、こめっこのような団体があったなら！どんなに支えられたかわかりません。子供が成長した時に手話でも音声でも選べるように、まずは私が手話を学びました。現在息子は音声で話しますが自分には「手話が要る」と言っていて、それを伝えてくれた時は嬉しく思いました。今日の先生方のお話を聞いても良かったんだと思えました。私は手話の魅力に

どっぷりはまり勉強継続しています。息子は知的障害もあるので語彙を増やすにはかなりの時間を要したり、コミュニケーションを取るのが苦手だったりしますが、親子で手話の会話も楽しんでいます。目を合わせての会話、最高です！たくさん貴重なお話を聴けました。乳幼児教室の保護者にこめっこを広めたい気持ちでいっぱいです！

〇最後に、「こめっこが学校になったらいい」という参加者からのコメントが紹介されていました。私の立場からは、この言葉がたいへん象徴的な意味を持っているように思えました。

〇専門的な部分は少し難しいところもあったが、ろう児にとって手話が必要であるとよくわかった。それがないまま、今大人になっている人たちはどうしたらいいのかと思う。

〇早期に言語獲得の環境を整えることが重要で、言語獲得に音が必ず重要でないことが理解できた。

〇乳幼児期から手話で育てることの大切さをあらためて感じ、教育相談に活かしていきたいと思いました。コロナが終息したら、是非『こめっこ』の見学に行きたいと思っています。

〇企業内で、聞こえにくいスタッフと働いていますが、聞こえにくい自分を受容していない、と思える方が多いと感じています。自己肯定感が低く、自分の思いを発信できていないのでは、と。自我が芽生える前の、聞こえる親との関係に課題があるとでは？と思っていた時にこめっこの活動を知り、これこれこういうのが欲しい、と思っていました。同時に、自分の子が聞こえにくいと診断された聞こえる親への支援を、何とかならないか、日頃思っていた時に、やはりこめっこの活動が、そうそう、と嬉しく思いました。100%聞こえる人にはなれない人工内耳の子や、残像聴力のある子が、聞こえにくい自分をきちんと受容できないまま、宙ぶらりんで社会に出て苦労している子達を何とかしたい、ただただそう思います。日本全国にこめっこのような場所が、拡がる事を願います。

〇きこえない子どもが、どうやって言葉を覚え、手話を獲得していくかということが、自分のこととして、少し分かったように思う。また、こめっこの中で発達検査を定期的に行い、育ちを確認しているということも非常に重要なことだと感じた。

〇こめっこは以前から知っていたが、具体的な内容を知ることができた。都道府県単位でなくもっと身近な所で通える範囲に欲しいと思う。

〇シンポジウムの各講話が興味深い内容でした。各講話をもっと掘り下げてお聞きしたいと思いました。関係書籍の紹介がありましたので、もう少し学びを進めたいと思います。

〇0歳から3歳までが愛着感情を定着させ、言語獲得のために大切な時期であるということがよくわかりました。

〇非常に専門的であったが興味深く聞かせていただいた。それぞれの立場での見解を知ることができた。広く視野を持ち、選択肢を広げておくことが大事だと感じた。私の地元では聞こえない子どもの親御さんが入門基礎講座を受け、おそらく求めているものと違うと感じて続かない例が割とある。こめっこのようなところが日本中至る所にあれば良いと思う。

〇こめっこが始まる前に、河﨑先生の講演を聞いたことがあり、興味を持っていました。その後、久保沢氏を兵庫のろう教育フォーラムにお呼びして講演していただく機会があり、兵庫でもこんな活動ができたらいいなあと思っていました。現在は、「ふくろうの杜」4 階で放課後等デイサービス「ふくろうっこ」工作プログラムを月1回担当しています。制作過程に仲間で助け合ったり、制作後に一緒に遊んだりできる手作り教材を手話で説明しながら指導しています。地域の小学校に通っている子が手話を受け入れられないなど、課題も山積していますが、ろう者の指導員と打ち合わせを重ねながら取り組んでいます。「ふくろうっこ」に乳幼児はいませんが、今回のシンポジウムはとても意味深い内容で関連性を感じました。先生方のような専門性はありませんが、学んだことを少しでも現場で生かせるよう頑張りたいと思いました。

〇以前、河﨑先生の「こめっこ」についての講演会を聴講していたので、ろう乳幼児が自分の意思を発信する手段についてとても興味をもちました。聞こえる親と聞こえない子どもが、心を通わせる手段については今後も継続して学びたいと思います。 東広島市は取り組みが始まって間がないので、「難聴児を持つ親の会」と今後どうかかわっていくか、ろう協と関係団体でどのように進めていくかをみんなで考えていきたいと思います。

〇第 2 部、ディスカッション。子どもの手話言語獲得と、聴を介した（補聴器、人工内耳などの使用）口話による言語獲得とを、多くの場合、“二者択一式”にとらえた上で、聴力障害を有する子どもの発達支援のための、施策立案やその意思決定がなされている現状。一方、それを“あたりまえ”とした支援で、子ども一人ひとりの発達を見据えた支援になるかという問い。両者の存在が明確に浮かびあがったやり取りだったと思います。
子どもの支援は、子ども自身と、その子どもと向き合う保護者を励まし続けるものになっている必要があると思います。自分自身の「ことば」獲得による子どもの日常的安心、精神的安定と、それを目の当たりにする保護者の安心、これに到るための支援がことのほか大きな励ましであると思われます。日常的なこめっこの活動や研究による成果、その事実蓄積が、ろう児発達支援のあり方を問う上記問題解明に大きく寄与するものと感じました。

〇今の専門家の顔触れや研究を知ることができた上に、こめっこの活動も知ることができて本当によかったです。

〇今年度から聴覚支援学校へ手話による絵本の読み聞かせに行くことになり、ろう児のことをもっと知りたいと思い参加しました。図書館員として子ども達へ本の楽しさを伝えるため、もっと手話を学びたい、聴覚障害について理解を深めたいと改めて思いました。

〇子どもたちをネイティブの中で育てるという取り組み自体がすばらしいうえに、しっかりした理論に基づいて運営されているところがとてもいいと思いました。シンポジウムで、最新の研究について知ることができて、勉強になりました。地域の子ども向けおはなし会に関わっているのですが、そこでも、始まりの歌、さよならの歌は毎回同じものに決めていて、まず自己紹介した後、絵本やわらべ歌をみんなで楽しむという流れなので、聞こえに関係なく、子どもたちが安心してことばやふれあいの体験をできる流れは同じなのだと感じました。

〇一度、群馬県の聴覚障害者コミュニケーションプラザで「こめっこ」の方の講演会に参加したことがあります。そのときのお話から何年か経ち、聞こえない子どもを持つ保護者にとってなんと心強い環境になっているのだろうと思いました。今回、字幕とスライド、手話通訳がついていろいろな人にわかる動画でした。

〇通訳現場で日本語の概念がない高齢ろう者の通訳を担当する時に、学齢期を口話教育を受け日本語を学ぶ機会がなかったことが伝わり難い原因と痛感します。生まれてすぐに第一言語を身に着ければ、そこから音声日本語また書記日本語を第一言語を通して身につけることができると思います。親子であっても手話と日本語は言語が違うということを知らない人がほとんどです。今後両親や家族が言語の違いを知り、手話を学ぶことによってお互いが分かり合えるようになるのではないかと期待できます。こめっこの取り組みはとても興味があり、日本中に広がることを望んでいます。

〇通所児童デイサービス指導員として、初めて難聴児を担当。(両親は健聴)保護者への配慮と幼児への対応について悩む日々を過ごしています。専門性のない自分が関わる 2 回/1 ヶ月(1 時間×2 回)の支援に何ができるのか？手話基礎講座を受講し始めた時期と重複したのは偶然なのか？医療や福祉、教育など国内での地域格差を強く感じています。コロナ禍が生んだ WEB でのつながりを活かし、NPO こめっこからの発信をアドバイザーとして、サポーターとしての自分を成長させたいです。今回のシンポジウムは、幼児期の発達に関する講話がとても知りたいところでした。難聴児→きこえている児→手話言語は必要ないという、保護者の意識を変化させることは本当にデリケートです。

〇オンデマンド配信は、複数回、見させていただいたうえで、職場の同僚とも同じテーマで話し合いを深めることができました。

〇障害児支援をしています。子供に必要な支援が必要に合わせて届く社会になって欲しいと思います。分からないことがわかる事は、生きる為に必要なこと。第一言語は親の言葉でなくても、育つ事がよくわかりました。聞こえない子供以外にも、手話(目で見てわかる)が必要な子供がいます。改めて、その子 1 人 1 人に合ったコミュニケーションの方法を考えるきっかけになりました。こめっこの活動は、子供は自分が大好きになり、親は子供を心から愛す事ができる、幸せ家族が増える素晴らしい場所だと思います。

〇私の子どもは 2 人いますが、2 人とも聴覚障害者で、すでに社会人となっています。その当時お世話になった聾学校が聴覚口話法での指導でした。うちの子どもは 3 級と 6 級なので、聴覚口話法でもなんとか育ちましたが、本当は、親が手話を覚え、手話も交えながら日々向き合っていたらもっと伸びていたのではないかと思います。こめっこは体制が整っていて、その当時にこんな施設があったら、親も子も安心して子育てできるのではないかと思います。日本財団の助成を受けて、このような大きな会が開催できることについて、うらやましく思います。このような取り組みが全国に広がっていくことを願っています。

〇地域に耳のきこえないお子さんを育てる親御さんがいます。この地域ではきこえない子どもたち、またはその親御さんに、どんな支援ができるかと考えながら、視聴させていただきました。きこえないお子さんに大切なことや、こめっこの活動をもっといろいろ知りたいです。

〇幼い子どもたちが様々な感情を育んでいくなかで、それを表出できる言語(の獲得)の意味は非常に大切なものと思います。きこえない、きこえにくい子どもたちがきこえる子どもたちと同じようにそのチャンスに巡り合える場所としてあり続けていただきたいですし、特別な場所ではなくどこにでも当たり前にそのチャンスがあふれている社会になってほしいと願います。

〇多職種の先生方からの視点からのディスカッションがとても興味あるお話でとても勉強になりました。放課後等デイサービスの利用児童の中で 8 名の聴覚障害児が通ってきています。人工内耳の児童は 3 名います。5 名は補聴器です。みんな手話でのコミュニケーションを取っています。スタッフや、健聴児童のなかにも手話を覚えようとする意欲もみられます。これからもたくさんの人と手話で繋がれるように楽しく勉強していきたいと思います。

〇0 歳~3 歳までの子供の発達に、両親へのフォローが大切ということが分かった。日本全体に理解が広がることを願う。

〇関東に住んでいる為、関西で開催されるイベントには参加できずにいましたが、今回はオンラインだったので初めて参加することが出来ました。オンデマンドで配信されていた内容もとても面白かったですし、当日のパネルディスカッションではそれぞれの立場での子供たちへの見方なども知ることが出来て、とても参考になりました。コロナ禍でろうの子供に接する機会が少なくなってしまいましたが、また自由に交流が可能な時が来たら、子供たちと手話での会話を楽しみたいと思いました。

〇NPOこめっこの皆さまは、前例の無い状況からスタートして成果が認められたのと同時に手話言語条例制定により大きく早期教育の重要性が著名に成り、進展したことが事前動画配信から実感しました。人格形成の発達、言語獲得と脳の働きとの関連性などよく分かりました。

〇今回のような、それぞれの専門分野からの視点で議論をかわすのは、とても勉強になりました。
やはり相違はありますが、それを議論、共有することが理解を深めることができ、活動や支援につながるきっかけになると思います。

〇自然言語である手話をきこえない子どもたちが母語として自分のものにしていけるように、更に学んでいきたいと思いました。

〇各分野で活躍されている方が、限られた時間にコンパクトに集約されて意見を述べられ、質疑応答も理解が深まるようなやりとりをしていただいたので、大変勉強になりました。乳幼児期からの対応の大切さを痛感じつつも、聴覚支援学校現場にはモノ・カネの制約が大きく、教育活動には多岐にわたる課題があるため、日々歯がゆい思いでいる教員も多いかと思います。今回のシンポジウムのような内容に触れることで、教員もエネルギーをもらうことになるかと思います。

〇「こめっこ」の活動があることは、知っていましたが、今回お話を伺って大変興味深く感じました。実際に関わっている方は、情熱を持って関わっていることがよく分かり実際に様子を見る機会があれば、是非見てみたいと思いました。

〇様々な立場からの話題提供がとても良かったです。いろいろな考えがあること、あっていいことが分かったことが大きな収穫でした。職場でもみんなで討論していくことが大事であると思いました。あ

〇登壇された方が沢山いらして良かったです。それぞれの立場で考え方が少し違うのがわ

かりました。私個人としては、言語が中途半端にならないよう、まずは日本手話を習得してから日本語を習得するのがベストだと考えているので違う考えの方がいらっしゃるのに驚きました。

〇子供たちの手話言語の習得について、聴者の言語獲得をイメージしながらとても興味深く視聴させていただきました。また、各先生方、各団体の取り組みについて知ることができ、それをシンポジウムという形で、手話に関わる人たちが心を寄せる人達 930 人も多くいらっしゃるということも知り、励みになりました。

〇いろいろな分野の専門家の方々が話してくださったことが、とても意義深かったと思います。同じテーマについて、意見が分かれることも「偏りのない幅広い情報」を知ることにつながり、もっと知りたいと思いました。

〇聞こえない子にとってやはり手話は大事な自然言語であることを再確認することができました。また、「わからないことがわかる」ということが、知りたいという欲求につながっていくことも改めて感じました。各分野のエキスパートとして活躍されている先生方の説明を拝聴して、これから更に手話はすばらしい言語として社会の中で認知されていくだろうと更に明るい未来を感じることができました。
前川先生の、生まれた子どもが再びお母さんのおなかに戻っていくという CL に、先に生れた子どもの心情が非常に伝わってきました。

〇各専門分野先生方のお話しを伺え、とても良かったです。質問の中に、聞こえないお子さんがいらっしゃる親御さんの悩みが窺えました。全国規模で専門の相談機関が充実することを願います。

〇耳鼻科医、言語学、脳科学、心理発達、手話言語教育など様々な視点からの話を聞くことができ、本当に学びが多かった。親と子が一緒に手話にふれられる場所があることの大切さを改めて実感した。
全国にひだまり MOE のような相談窓口ができないと、聞こえない子供を持った保護者は偏った情報の中で不安な時間を過ごすことになる。全日本ろうあ連盟が「きこえない、きこえにくい子供持ったお父さんお母さんへ」のパンフレットを作成し、地域でも医療機関などへ配布しているが、相談窓口の地域差が大きく、とても歯がゆい。こめっこの活動が神奈川のように全国に広がることを願っています。＊手話通訳が本当にわかりやすく、毎回勉強になります。

〇武居先生の聾児の手話の発達と言語発達は同じだというお話に、深く頷いていました。過剰汎化も、ST しているとよく出会いますー。こめっこの活動の成果が出てきていることに、とても嬉しく感じました。応援してます！コロナがもう少し落ち着いたら、ぜひ見学させていただき

たいです。

〇興味ある内容でもう少しお話を聞きたいと思いました。 話題にも挙っていましたが、親が人工内耳を選択する際、手話使用について否定的なアドバイスをされるドクターもみえると聴いています。保護者支援を担う立場として、医療機関で統一した情報を提示していただけると有りがたいと感じています。武居先生の言語発達過程における話題提供には、大変興味をもちました。

〇難聴学級で介助員をしています。武居先生、河﨑先生のお話がスーッと胸に落ちました。ご両親(特にお父さん)が手話を学ぶ機会の保障が難しいなぁと感じています。地域の聴言協会との繋がりも大切にしたいけれど、教育現場との連携の難しさを痛感しています。そのあたりのお話も今後お聞きしたいです。

〇耳鼻咽喉科の南先生も交えたお話を聞くことができてよかったと思います。

〇耳鼻科の医師のお話しも伺うことができ良かったです。いろいろな考え方があるからこそ、多方面からの議論が大切だと思いました。

〇なんとなくこうかなぁ？と思っていたこと(耳鼻咽喉科としての立場の考え方と言語学的な考え方など)の話も、あらためて言語化していただいたことで理解が深まりました。ただ、まだまだ私自身、落とし込めていないので、もっと色々と伺いたかったです。また、まわりにもコーダやろう児難聴児が多くいるので、よりたくさんの人たちにこめっこの活動を知ってもらえる機会をわたし自身も提供したいと考えております。

〇耳鼻科の医師の方のお話を聞いてみたいと思っていたのでよかった。聞こえる親との意思疎通手段は必ずしも日本手話でなくてもいいとも感じました。

〇研究者と医療従事者の間でも、手話の必要性について賛否両論あることがよくわかりました。赤ちゃんを抱えた保護者にとって、医師は大きな拠り所で、その言葉は大きな影響力を持つと思います。こめっこさんの取組みの中で、手話の必要性をさらに研究していただき、耳鼻咽喉科学会等を通じて全国の耳鼻咽喉科の先生方にも療育の大切さを共有していただきたいと思います。

〇お子さん自身の手話言語獲得と同時に、健聴の家族(親、きょうだい児)が第二言語として手話習得にどのように取り組むのか関心があったため、とても勉強になりました。また、人工内耳装着の場合、音声言語を優先させるべきとの考え方は聞いたことがあったので、南

先生、古石先生のやりとりは非常に興味深かったです。

〇耳鼻科医と言語学の視点から話を聞く事ができて、新鮮だった。考え方もわかりやすかった。

〇厚労省の今後の動きには注意していきたいと思いました。

〇乳幼児が生まれる前からの指導方法には、大きく賛同した。ろう乳幼児からのサポートの方法には、当事者だけでなく講演を聞いている私たちにも賛同でき素晴らしい方法だと思った。乳幼児たちが興味を持ち、手話活動に意欲を示しそうだと思った。言語と心理学の獲得の重要2つがあって初めて乳幼児の手話言語が成り立つ。

〇今回でこめっこの活動内容を聞くのは2回目です。河﨑先生の志が高く昨年よりさらに考えられた活動内容に驚きました。また専門分野からなる教授の方々の専門知識からの見分も興味深く聞けました。すべて聴覚障害にかかわる方々のための活動でさらなる発見や感動が生まれてくるような気がしてドキドキしました。今回のシンポジウムを聞き、改めて環境の大切さを感じ自分自身気を付ける事、周りに対して考えることを心掛けなければ…と思いました。これからの手話活動に活かせればと思います。

〇昨年初めてシンポジウム第１部を受講し、その時点では、理解できたと思っていましたが、今回2回目の受講をし、昨年よりも深く理解することができました。（昨年は、大枠をとらえただけだったと思います。）こめっこの活動は、一本筋が通っているところへ枝が何本も出て、包括的に乳幼児とその親をフォローしていて、すごいなぁとつくづく思いました。沼津市も R4年度から事業開始予定ですが、あまり焦らずに一歩一歩着実にすすめていきたいと思います。

〇「こめっこ」に関する講演会は2回目でした。聞こえない赤ちゃん、子供に対する手話を獲得するための環境整備はとても大切！と痛感したし、逆に両親にもそんな場は必要だと思います。「大丈夫と思える基地」は親にも子供にも大切で必要です。「心を守る」というお話はすごく心に響きました。子育てには悩みは多いものだし、心のよりどころがあるとゆとりも持てて子育てにもいい影響が出てくると思います。沼津にもそんなすてきな場ができて、聞こえないお子さんたちがいろいろな能力を発揮して成長できる環境ができたらいいと思います。「形式」と「意味」の2つが重なり言葉として発達するんですね。心も成長して人と関わる力が育っていくんですね。

〇素晴らしい取り組みだと思います。大阪府のような大都市でなくても、また、学塾的なアプローチが十分にできない地域でも、ろう乳幼児とその家族が手話と触れ合える機会が持て

るよう、この取り組みが全国に波及することを期待します。

〇言語獲得は、健聴児と共通していることを考えると、ろう児には、手話が必要ということを再確認しました。健聴児と同じ処遇が、ろう児にも受けられるような社会保障が必要だと思いました。

〇ろう児にとって手話を母語とし、第二言語の日本語を学ぶことについて効果が実践されているが、耳鼻科及びろう学校ではその考えがあまり知られていないことを残念に思う。

〇子供が聞こえないと分かったときに、どれだけ保護者にいろいろなコミュニケーション手段や言語の選択肢があるかをきちんと説明できているのか疑問に思う。

〇聞こえない子どもたちの未来が少し明るいものになるのではと感じました。昔の教育を受けた姉について、改めて考えました。

〇幼児教育にパートですが関わっていて、通園していた聴覚障害を持った男子園児のお母さんに、今後のことで相談されていたことがありました。自分のアドバイスが良かったのか心配でしたが、こめっこの活動や、今回の学習会で間違っていなかったなと安心できました。

〇改めて、こめっこさんの活動内容の素晴らしさと、ロールモデルとなるろう成人の方の人材の豊富さに圧倒されました。0 歳から 3 歳という、聞こえないとわかってとても早い期間に、これからの人生でこれだけ重要なことの基礎となる環境を子どもの周りに提示しなければならないこと、地方に住むものとして何とも言えない気持ちにもなりました。大阪以外で生まれたから諦めなければならない、とならないように、今できること、それが未来につながるように頑張ります。とても内容のあるパネルディスカッションでした。

〇毎日きこえない・きこえにくい子どもたちとやりとりする中で、お互いが分かり合う状況がいかに大事かを実感しています。そこには、深い話ができるための手話言語が大切であり、お互い理解できたかを確かめ合うための日本語も大切です。コミュニケーションと言語について今一度自分の中で整理し、今後の学校での勤務や、現在取り組んでいる個人研究にも生かして行きたいと思います。今回も大変勉強になりました。

〇引き続き関心をもっていくべきテーマと認識いたしました。と同時に、大阪以外、神奈川に続けて、各地でにこのような活動が拡がることを期待しますが、地域の力、マンパワーが必要であると感じました。

〇補聴器や人工内耳が手話、ろう文化を消されていくように思えて危機感を感じている。聞こえない聞こえにくい子どもたちが自然な形で育つことの大切さを大人たちがもっと認識すべきではないかと思う。こめっこという場所が全国各地に広まりたくさんの親子を救い支え、いろんな聞こえない聞こえにくい子どもたちが堂々と当たり前に生きる社会になっていけるようにもっと大人たちが考えなければならないと思う。聞こえない聞こえにくいことがどうして社会にて当たり前に生きさせてもらえないのか？それぞれの生き方に歩み寄り支えあうことができる社会、世界を作っていくのが今の子どもたちだと思うので大事なことを技術とかでなく心で引き継いでいける教育を願う

〇初めて参加しました。現在、名古屋で聴覚障害児を対象とした児童発達支援・放課後等デイサービスの管理者兼児童発達支援管理責任者をしております。なかなか周りに聴覚に特化した事業所がなく、悩みを共有できるところが無い、また研修等も少なく困っています。人工内耳装用児の保護者は、本日話題に出た様に視覚言語（手話）を見ると音声言語が伸びなくなると病院や ST 時に言われる事が多く、手話に触れる事に不安を感じている方もいらっしゃいます。わかる経験の積み重ねがわからない事に気づくというのは、子供達の支援をしている中感じます。また、最後に出た漢字には意味があるので言語発達において上手に使っていけば言語が伸びるのでは？と学習支援を行なっている際に感じています。日本語も手話も曖昧な子達と関わる中、どんな支援をすれば良いのか日々試行錯誤の毎日です。コロナでなかなか保護者支援がままならず苦しいですが、保護者が手話を学ぶ機会を作ったり保護者同士が情報共有できる場の確保を無くさない様にしていきたいと思います。

〇日頃からろう者の手話教師に接しているため、全て納得がいくお話でした。最後のシンポジウムでは、一部質問と回答にズレがあるように感じました。そこは丁度、聞こえなくても社会に入ったら日本語が必要なんだから、口話ができた方がいいというような、よく聞く考え方と、子どもの健全な心身の発達という観点からの見方とのズレにも通じるものがあると感じました。以前 E テレで、コーダを育てるろう者の苦労と周囲の工夫の番組がありましたが、コーダ自身も親としっかり通じるコミュニケーション手段として手話があった方がいいのにと思って見ていました。音声が通じない親よりも、よそのお母さんに話しかけるという子供の姿も、それを寂しく思う親の姿も見ていて辛かったです。そんなことも思い出しました。

〇息をするのと同じように言語を自然に獲得することの大切さを改めて認識しました。「9 歳の壁」ではなく0to3 なのですね。聴覚障害児にとっては概念獲得にはまずは視覚言語だとどうしても思ってしまいます。私の回りにいるろうの方たち（70 代 80 代）の「うなずき」は「先生の説明がわかった」という「うなずき」ではなく先生の「わかったか？の口話がわかった」という反応の習性だと聞かされたことが今でも忘れられません。

〇こめっこでの活動内容が詳しくわかりやすく説明されていたと思います。こめっこでやっている指導が全国の聴覚支援学校で出きるようになると良いなと思いました。また、それぞれの専門分野で 話された先生方の話しも素晴らしかったです。高度過ぎて理解できないところもあるので、もう少しかみ砕いて話していただくともっと楽に聞けるのかなと思いました。

〇完全なろう者同士の会話は日本手話という言語でなされてしかるべきでしょう。でも、両親が健聴な親のもとに生まれた難聴児も、日本手話の獲得がベストなのでしょうか。小笠原クレオールのように、日本語対応手話がなっていく？？ということは、不可能ですか？日本手話のマスターは難しいなぁと思うので、難聴児童のご両親にもハードルが高いのではと、思うのですが。家族と会話が伝わり安いことよりも、ろう者の文化である手話をマスターすることの方が良いですか。その方が幸せになれるのなら、そうなのかも？

〇言語の習得にかかわる、言葉の構成やバイリンガルという見方、実際に手話を言語として使っている立場様々な見地、実際にこどもたちとこめっこさんが大切にされてきて、こどもたちが育っていくのに大切にしている事をお聞き出来てよかったです。今回は難聴のこどもへの手話というところのお話でしたが、様々な疾患や発達障害のこどもたちの事が頭に浮かび、言語の成り立ちや難聴によって、その他の障害によって、どう言語を取得しにくいのか、第一言語をしっかりと持つことの重要性の一方で、例えば人口内耳を装着して、音声言語を聞き取るための訓練と手話を分けるというご提案を考えると、その訓練が毎日あるわけではない、日常生活の中ではどうしていくのがいいのだろうかという疑問が残ります。目の前の人と会話をする、コミュニケーションをとる、状況を理解する、言葉を理解するは、それぞれ構成要素が異なるのだと思いますが、手話や見える形での表現も共通認識をもって、その場の熱量が損なわれない間(ま)でやり取りができる、その生活の場で過ごしていくという意味では確実に大切な表現だとも思いました。自分の内側にある言葉を外に表現したい、してみた、伝わったという事と自然言語の習得過程、第一言語というのは相関性を持つのか今後分かってくるといいなと思います。思考言語が何になるのかまで考えた事がなかったので勉強になりました。勤めている園でも、こめっこさん、しゅわっちさんの手遊びのような手話やっていきたいと思います！

〇私は 20 歳ごろに聴覚の低下を診断され、それから少しずつ聴力が低下し、今は補聴器(感音性難聴 4 級)をして暮らしています。自分は言語を習得した後の難聴なので、言語獲得･思考能力獲得に関しては何も言えませんが、、、たとえ人工内耳をして通常学級でやっていけてるように見えたとしても、健聴の人と同様に授業がすべて聞き取れて、健聴の友達と同等に会話ができるようにはならないと思います。
不完全な理解で、ちゃんとわかっているのかいつも不安で、、友達にはいつも教えてもらうば

かりで、対等に付き合うことができなかったとしたら、その子は自信を持って生きていけるでしょうか？
聞こえない・聞き取りにくい自分が、周りと変わらず、対等に交流できる世界があってはじめて、自分自身に自信を持って生きていけるのだと思います。だから、ろう者、難聴者、人工内耳、補聴器等、聴力の差は関係なく、みんな手話を共通言語として身につけて、手話の世界で「全部わかる」「はっきりわかる」「友達と対等にしゃべれる」「自由に会話に加われる」体験を繰り返したら、それが自信を育ててくれ、聴者の世界でもどこでも、下を向かないでやっていけるようになると思います。だから、言語能力向上とか「人工内耳なら口話教育の方がいいだろう」とか、「聴力レベルに応じて」とかは、とりあえず置いておいて、手話を覚えられる場所があって、だれでも自由に参加でき、そこに心の居場所ができたら、
聞こえる世界でも、聞こえない世界でも、好きなところで幸せに暮らせるんではないでしょうか？

〇難聴者（40 歳頃から）補聴器を装用しています。南先生のお話の中で、視覚か聴覚かを選ぶというお話があり、現実はそうなんだと思いました。聴覚を選んで、音声日本語で話すことができるように人は、少ないと思います。また、話せても、聞こえは聴者のようには、ならないので、小学校の授業もサポートが必要です。また、ともだちとの会話も、聞こえるふりをしてしまう。わからないのに、一緒に笑うことになります。難聴になってから、手話を勉強しています。大人のろう者もいろいろな方がいます。親もろう者の方は、元気だと思います。聴者の両親から生まれて、家族が誰も手話を使わなくで、大人になった人は、寂しそうです。家族とは、距離を置いている人がいます。聞こえない人は、補聴器・人工内耳でも、聴者のようには、聞こえません。聞こえについては、一人一人異なるので、わかりません。0歳から3歳の孫がいますが、この時期に聞こえなくて、言葉を持てなかったら、自分の考えを、伝えることも、それより考えることが、できないですよね。愛知県から参加です。河﨑先生、古石先生に講演会をお願いしたいと思いました。

〇「こめっこ」さんの活動は、たいへんすばらしく拝見した。一方で、その親御さんの置かれた環境によって、非常に難しいと感じた。ろう親＋ろう児であれば確実に手話を取り入れていくことがBEST。しかし、健聴親＋ろう児の場合、地域に「こめっこ」のような活動がなかった場合や、逆に人工内耳装用を受けられなかった場合など、「こうでなくてはダメだ」と言われた瞬間に、親御さんはつらい立場に追い込まれる、それは最も避けなければいけないことだと感じた。手話を含めた幅広い情報保障の在り方や、サポート体制を、時間は必要かもしれないけれど、それぞれが今できることをやりながら、協議していく必要性があると思った。

〇手話を一つの言語としてろう児、難聴児に早い段階から習得させる環境をもっと広げていかないといけないと思った。まだまだ手話ではダメなのではないかと考えている方がおられる

ので、さらに啓発活動が必要だと思った。

〇早期教育、言語獲得等教育の重要性を再認識する機会となりました。一方で成人(とくに高齢者)の言語獲得の機会(口話教育)による社会参加への影響、また手話が言語として認知されていく中で、どのように解決していくことができるのか、当事者とともに改めて考えて議論していきたいと思いました。

〇0 歳から 3 歳までに、十分にわかる経験が必要であるということ、それを実現するために、きこえない、きこえにくい乳幼児にどんな環境を与えたらいいか、わたしの住む地域の難聴児を持つ親の会のみなさんたちとともに考えていきたいと思います。FCEI という考え方を知り、家族の方々の思いも聞きながら進めなくてはいけないと強く思いました。つい、手話を覚えた方がいい、手話を覚えさせるべき、というような論調になってしまうと、今まで手話にもろう者にも出逢ったことのない保護者の方々は戸惑ってしまうのではないかと思います。今回のシンポジウムについても、親の会のみなさんを数回お誘いしたのですが、参加申し込みがあったかどうか、わかりません。きこえない、きこえにくい子どもたちが夢を持って成長していけるような地域にしていきたいと思います。今日学んだことを、ろう乳幼児手話獲得支援事業に生かすべく、近いうちに勉強会を開くことを、ろうあ協会と関係者と協議します。

〇新生児聴覚スクリーニング検査でのリファー後の中立的網羅的な情報提供、選択肢提供の必要性、家族のメンタルケアの必要性を改めて痛感しました。中立的な情報提供の面では、まだまだ多くの課題が残っていると感じますが、ろう特別支援学校での乳幼児相談の役割の重要性を再認識しました。ろう特別支援学校などの教育機関、行政機関、医療機関との意見交換や連携が大切だと感じますが、その連携面でも課題があると思います。現状では、保護者やその家族が自分の足で色々な情報を得て言語獲得の方向性を決めていると思います。(中にはいち機関の偏向した情報だけで方向性を決めてしまう保護者もでてきてしまうおそれがある)組織内での研修などで知識や理解をアップデートする機会を持てると良いのですが、教育機関では短期間での人の入れ替わりにより、専門性や知識の継承がされにくくなっていること、専門性の流出が課題だと思います。(これは教育委員会の人事ルールや学校長の考えに依存しますが)全国のろう難聴乳幼児の保護者とその家族に中立的網羅的な情報・選択肢の提供の機会が得られえる制度が発足されるよう希望しております。そのための予算が確保されることも願っております。そのような制度が発足されるよう応援できればと思っています。

〇ろう学校では、乳幼児相談が縮小されていく状況があり、0～3歳の子の環境整備をどこが担っていくのか、早急に進めなくてはいけない問題だと思いました。

○聞こえないこどもにとって手話は必要とされ教育に取り入れるようにはなってきましたが、教育の基本はやはり「日本語獲得」に置かれ手話は後付けのように感じています。「社会に出たら筆談になる。だから、日本語が書けなければだめなんだ。」と教員も教え込まれ、学習の場では声を出しながら手話表現をしています。誰のためへの声で？誰のためへの手話なのか？日本語どころか、どちらも中途半端で自分の気持ちを言葉に置き換えることができず悩み苦しんでいるのではないか？私は教員ではないので勝手な憶測は言えないと思っていました。しかし、学童期では遅い「乳児期から手話での会話を楽しむことが必要なんだ」と今回参加して強く感じました。聞こえない子供への子育てに当たり前のように手話が取り入れられたら親子関係も学習も変わるんだなと思いました。

○私の学校は、聾の先生が 0-3 の担当でいて、すごく日本手話を伝え、育て、保護者支援をしている場所です。認知してもらえる場所となると嬉しいです。すごく頑張っているので。もちろん、公的な学校なので聴覚や音声言語も頑張っています。

○人工内耳を選択したしても乳幼児の時期において手話が必要だという説得感が増してきたと思います。生まれてすぐろう難聴と発覚してからの聴親への支援やろう乳幼児への手話環境の保障体制を国として進めてほしいと思いました。

○日本手話は単なるコミニケーションではなく、言語であること、また手話の必要性を医療関係者にも理解してもらいたいものです。

○親子が手話でコミニュケーションをとる事を支援してくれて、共に成長する場がある事は本当に素晴らしいと思います。難聴児、人工内耳手術をした子供達も手話を取得したほうがその後の人生の強みになると思います。手話が、音声言語発達の弊害になると思っている医師がいるという事が残念です。医師こそ、このようなシンポジウムに参加し、きこえない人の事、手話の事をもっと深く理解して欲しいと感じます。

○登壇された先生方がそれぞれの専門的な見地から発言されていてとても参考になった。人工内耳や補聴器装用と手話言語獲得のメリットの部分がまだ整理されていないように思うので今後の大きな課題であると感じた。

○「音声言語の獲得には手話が邪魔だ」という認識を持っている耳鼻咽喉科の医師がまだまだいるというのなら、医師の教育現場のカリキュラムにきちんとしたデータを基にしたもの（言語学になるのか？）を含めるべきでは？また、音声言語の獲得は聴力の良い人が有利なのは当たり前で、発音の良さとその人の人間性や知的発達の度合いとは全く無関係であるということをもっとはっきりとデータで示して欲しい。そこを聞こえない子どもの保護者、耳

鼻咽喉科の医師にもわかってもらう必要があると思う。音声言語はある程度の習得で良いとわかれば、限界のある音声言語獲得ばかりに労力や時間を割くのではなく、楽しく手話を学ぶ方に力を注げる。

〇事前配信の中でも繰り返しみなさんが言及されている、「わからないことをわかるためには、わかる経験が必要」ということは、地域で学んでいる難聴の子どもたちと関わっていていつも感じることです。人生のスタートの時期にそれを保障していくことが、その後のさまざまな発達に大きく影響するというのは本当にその通りだなと感じました。また、こめっこの活動以外の時間に、いかに同じ言語でやりとりをする場、経験を保障できるか、というお話はとても考えさせられました。乳幼児期の保護者支援もまったく同じだと思います。今後の活動や研究も楽しみにしながら、できることを考えたいと思います。

〇とても有意義なシンポジウムでした。私の息子は先天性盲ろう障害を負っています。手話に出会えたおかげで言語を獲得することが出来ました。先天性盲ろう児の言語獲得に対しても手話が大きく寄与することを経験から実感しています。息子は言語を得られたおかげで人と繋がる喜びを知り、それがさらなる言語力向上へのモチベーションになっています。成人した今でも書記日本語、書記英語、ASLの勉強を続けています。健聴ろう、国内外問わず、多くの人々と対話し楽しそうに世界を広げている息子の成長を嬉しく思います。 先生方のお話を伺い、早期に手話言語に出会い集団の中でやり取りすることが重要だと改めて思いました。その上で、ろう重複障害児教育の現状を憂いています。ろう単一障害児よりも専門性の高い丁寧な教育が必要な子どもたちですが、その機会を得ることが困難です。かつて我が子もろう学校幼稚部に入ることが出来ませんでした。ろう児のためのフリースクールに通ったり、お金と時間を費やして親が手話獲得に励むなど、個人的な努力を続けました。盲ろうなどろう重複障害児が言語を獲得するには相当の努力が必要です。家族の力だけでは厳しいです。ろう重複障害児も豊かな人生を歩めるよう、先生方からの一層のご支援をお願いしたいと思っています。

〇難聴児の親の会に属していますが、子どもの聞こえの程度も違う、親の考え方も違う集まりです。今、手話言語条例制定に向けて活動したいと思いますが、手話を必要としない家庭が多く、その必要性がなかなか伝わりません。軽度難聴でも人工内耳でも手話が必要だと考える親が少ないからです。せめて、医療現場や教育現場で考えが統一されてたらなと思って質問しましたが、まだまだなんだなと、道のりは長いなと感じました。少しでも早く、難聴に対するバリアフリーの意識が広まってほしいなと思います。

〇金沢大学の武居先生の、0-3 際に分かる経験をたくさんすれば、自分がわからないことがわかるようになる、それがその後同年齢の関わりの中でとても重要だというお言葉が胸に

響きました。また、耳鼻科医の先生の中では、やはり手話が音声言語かどちらかを選択する、選択すべきであるという考えがまだ一般的で、両者は使い分けするべきだというお考えをお持ちだということに課題を感じました。療育機関、行政、医療現場、そしてわたしたち保護者それぞれが難聴児の豊かな毎日のために日頃頑張っていることが最大の効果を出す為に、ユニバーサルな共通認識を作っていくことが重要だなと思いました。

〇医療機関の見解が統一されていないことが問題だと思いました

〇子どもの右脳が発達する時期、自己肯定感などに関係する時期、環境が大切な時期は6歳までだと考えていました。子どもの環境を作ること。聴覚障がいを持つ子どもには、人工内耳をしようが補聴器をつけようが手話は絶対に必要だと個人的には考えています。

〇手話の獲得が「言語の発達を妨げる」というのは、相変わらず当事者を苦しめている医学界の一部の「常識」なんですかねぇ？今回、「自然言語」という定義が出ていましたが、この部分の合意が足りないから齟齬が生じているように感じました。リモートの限界はありますが、久し振りに聴覚支援の大切さを感じることのできた貴重な時間でした。

〇耳鼻咽喉科 Dr には聴覚に障害を持った子供や親に適切な情報を提供する義務があると感じた

〇耳鼻科の先生方が言語学に関心をもたれること、手話に関心もたれることは、大変ありがたい。きこえないきこえにくい子ども達にとって、手話で分かる環境をつくることが情緒面の発達にとても重要であることを、理解していただきたいと思う。

〇聞こえにくい子どもが0-3歳に自然言語を獲得すること、その親御さんが子どもの言語獲得のために日本手話を日常に無理なく取り入れること、こめっこをはじめ周囲がそれをサポートすること、が重要であることを再認識しました。サポート方法の具体例については、南医師によって、補聴器や人工内耳など子どもによっては聴覚補助が有効であればそれを使い、日本手話訓練は音声言語訓練と同時ではなく空間と時間を分けて行うと良いこと、が分かりました。手話言語だけ聴覚補助による口話だけと決めず、それぞれの子どもが赤ちゃんの時から、一番幸せに言語獲得ができる方法を、親をはじめ周囲の大人が、ああでもないこうでもないと話し合って毎日進めていくこと、間に合わなかったと諦めないこと、いずれは子ども本人が決めて幸せに生きること、が大事だとも感じました。

〇言語について脳が視覚優位なのか音声優位なのかによるという話に驚きました。また、第一言語の重要性がわかり、乳幼児が障害あるなしに関わらず、自然言語の習得の重

要さをもっと早く気がつくよう耳鼻科医師も言語への理解が欲しいと実感しました。

〇人工内耳について、疑問があります。人工内耳は聴こえが良くなる、いろんな言葉が入ってくるなど、メリットばかりで早めに赤ちゃんから人工内耳を受けた方が良いと一方的に医師から勧めるのはいかがかなと思います。初めての子が聴こえないとわかった時の親の気持ちは察しますが人工内耳を勧めるのではなく、手話があることをまず理解し、親の心のケアも情報提供してあげてほしいです。健聴の赤ちゃんもまだ声が発しないので、ベビーサインを使っている人が少ないと思いますがベビーサインは手話と同じではないかと。それに人工内耳は親が選択肢で決めるのもいかがかなと思います。またはスポーツは可能でしょうか。出来ないスポーツがあると知った時の気持ち、出来るスポーツがあっても頭にぶつからないように気をつけないといけないのは本人だけではなく、親も気をつけながら、見守るのはいかがかなと。ありのままで自由にのびのびとできないじゃないかと。人工内耳か補聴器か選択肢は親ではなく、受ける本人ですから分かる年頃のお子さんに選択肢を決めてもらった方が良いのではないと思います。それぞれの考え方があるかと思います。お子さんがありのままでいきいきのびのびと手話があると親も一緒に笑顔を大事に育ててあげてほしいと願っております。

〇手話言語の大切さを感じない行政機関に対しての伝え方の難しさを日々感じています。このシンポジウムがもっと広まりますように…

〇前回よりもプログラムの作成が分かりやすかったです。変わらず活動内容を聞き感動し、また改めて考えることが多かったです。

〇時間がなかったからか、ディスカッションの内容が偏っていたように思う。もっと他の先生の話も聞きたかった。

〇補聴という立場からのパネリストが少ない。こめっこの中での聴覚活用の状況も知りたいと思いました。

〇。こめっこで学んだ子供たちがどんな大人になるのか、とても楽しみです。プライバシーの問題もあるかと思いますが、利用者の声も聞いてみたいです。

〇研究者の先生ばかりで、あまり現実的ではないかな？といった内容も正直若干ありました。けれどもこめっこの先生方が柔軟に対応してくださるだろうなという安心感があり、保護者も信頼を寄せることができるだろうと思いました。今度は学校現場の教員、保護者の実際的な悩み、不安についてのお話も聞いてみたいです。

〇こめっこの活動が更に深化、拡大していることがわかりました。このオンラインシンポジウムも非常に濃い内容で充実していました。登壇される識者の方々が適切で、科学的に、またろう児や保護者の悩み心情に寄り添うものだと思いました。

〇「自然言語」の定義をもう少し入念にしておくと、前提の異なる不毛なやり取りを解消出来たように思います。

〇とても貴重な内容でしたが、脳科学や言語学といったかなり専門的な内容でしたので、予備知識がないと理解するには難しいと思いました。また機会があれば、前川先生のようなろう者の専門家を登壇させてほしいです。

〇このシンポジウムは、聴こえない子どもたちの、手話という(母語)言語獲得に影響する極めて大事な事業のシンポジウムです。登壇者にはあるレベルの意思統一が図られていないと、こめっこの理念と大きくずれてしまう発言が出てしまい、結果的にろうの子どもを持つ聴の親を翻弄することになりかねないと思う。そうなれば、このシンポジウムの意味を損なうことになるのでは？と思いました。

〇それぞれの立場の方からの発言ですので、理解出来る事、出来ない事がありました。本質的な所での議論が足らないのではないでしょうか、例えば、人工内耳を装用されて、良かったひと、合わなかった人、合った人でも複数の方との会話は難しいとか、いろいろな当事者の声を聴く必要があると思います、人工内耳を選んだら、手話使用しないとか、0～3歳で手話を獲得しなければ将来取返しが付かないみたいな事だけが先行すると、聴覚に障害をお持ちの親御さんは、とても悩みますよね、それぞれの立場の方の発言としては正しいのだと思いますが、どうか今人工内耳の装用者、途中で諦めた方それぞれの意見も聞きたいです、でもどうか、このこめっこ活動が、聴覚に障害をお持ちの親御さん、子供さんの居場所になっていってほしいです。

〇次回は、当事者の保護者の意見や子供たちの日本語力の成長についてお話をお聞きしたいです。

〇保育士をしているが、聾の子供であっても健聴の子供であっても言葉の獲得に関して養育者の関わりは大切だなと感じた。

〇こめっこの活動自体すごいと感じましたが、神奈川にもしゅわまるという活動があることを初めて知りました。このような組織、活動が全国的に広まると聞こえない子供たちの選択肢が

増え将来への希望や夢の実現に向けて、障壁が少なくなるように思います。

〇手話や聴覚障害児についての研究内容に触れることができ、文書だけでなく生の声（講義）を拝聴拝見ができて刺激を受けました。最後の意見交換をもう少し聞きたかったです

〇手話を学び始めた人たちに「手話は言語？手話言語条例が居住の自治体にあるか？」を問うと、手話は言語だと思う。でも、手話言語条例すら知らない現実があります。このようなシンポジウムを多くの人が参加し、手話を知ってもらい理解を深め、広く啓蒙されることを望みます。

〇2 部仕立てになっていて、とても充実した内容でした。1 部の動画の視聴期間を長くとってくださっていたので、繰り返し見ることが出来ました。手話は言語であること、自然言語として獲得していくために大切なことや必要なことが分かりました。

〇本校の職員のみならず，ろう教育にかかわる教員，また聴覚障害のある CI にかかわる CP・CPP には是非見ていただきたいないようでした。今後とも，学びの機会を与えていただけますようお願い申し上げます。

〇オンデマンドや zoom で開催していただいたことで、地方在住でも参加でき、学びを得ることができました。本にしていただきたいほどの内容です。地方自治体でも、こめっこのような活動ができる日が来るよう、乳幼児教育相談や活動で、手話が、きこえない、きこえにくい子どもたちに必要不可欠であることを地道に丁寧に伝えていきたいと思います。

〇0～3歳の間に手話に出会い、わかる体験を積み重ねることの大切さはよく分かった。その上で、保護者の手話習得支援をするにあたって、具体的な方法やエピソードが欲しかった。「言語」だけでなく、「対話」にも焦点を当てたテーマを取り入れてもいいのではと感じた。

〇オンラインの場合、地域に関係なく参加できるので、今後も同様の方法で開催いただけるとありがたい。第一部はオンデマンドで繰り返しアクセスすることができる設定となっていたので、業務の合間をぬって、拝見させていただくことができた。第二部では、ろう児の教育について、異なる分野の専門家から話を聞き、また、最新の研究成果なども伺うことができた。それぞれのお立場からの意見交換も興味深かった。次回は、保護者の立場の声も聞いてみたい。今回のような貴重な学びの場を、また作っていただければと思う。

〇話題提供者の方もパネラーの方も内容が幅広く、また深いので、それぞれのお話をもっと時間をとってお聞きしたかったです。今日のお話をきっかけに、参考文献なども拝見したいと

思います。

〇多角的なゲストで視野が広がった。耳鼻咽喉科医師の参加も多様性という点から意義があった。

〇人工内耳手術を専門とされている耳鼻科医師の南先生にご参加いただき、率直な質問にご回答いただけたことは、これまでにない貴重な機会だったと思います。手話を除外すべきと考える療育機関の ST も少なくないように思いますので、次の機会には実際に現場で指導されるSTさんや、対応手話が主流の聴覚支援学校の先生方のご意見も伺えたらと思います。

〇最後の方での古石先生から南先生への質疑応答（手話・音声言語どちらかを選ぶ？同時に獲得する方法はある？）時間があれば掘り下げてもっとお二人のご意見をお聞きしたかったです。

〇手話を使うと音声言語の獲得に支障があるという考えを持つ耳鼻咽喉科医はまだまだいるようで、難聴で生まれてきた子のために手話を学ぼうとしていたお母さんが人工内耳の手術をしたので、もう手話は必要ありません、と習うのをやめてしまいましたが、その背後にはそのようなアドバイスがあったようです。聞こえない子が自分が聴こえていないのだと理解できるためには、親がそこを理解し、聞こえにくい子どもにとっての手話は重要なコミュニケーション手段だということを世間一般に広めてほしいと考えました。

〇第1部のオンデマンド動画の視聴のみの参加でした。そのため、第1部に予定されていた先生の講演が聴けなかったことは残念でしたが、こめっこさんの保護者さんに寄り添う丁寧なかかわりには、大変共感しました。また、早くから、保護者さんとお子さんがネイティブサイナーに出会う機会を設け、ろう者が生き生きとしている姿を、保護者さんに見て感じてもらうことが、いかに、その後の子育てのモチベーションの維持につながるかということもわかりました。こめっこさんのような団体が全国に広がって言ってほしいと思いました。

〇こめっこの様子がよくわかりました。年齢別のきめ細やかな運営は素晴らしいと思いました。保護者へのサポートもしっかりできているようで、沼津でも頑張ってほしいと思いました。

〇親子共々の将来を考えての事業の広がり、専門的な分野からの下支えがあっての展開にこの事業の強さを感じます。

〇こめっこの活動すばらしいです。日本中どの地域でも保護者が偏りのない情報に早い時

期に出会うことができ、療育につながるように願いたいです。国レベルで、ろう学校の 0 歳からの乳幼児相談に定数をつけて充実させていただくようにしてほしいです。家庭訪問支援も。手話が学べる環境、ロールモデルとの出会いの場、各地域で少しずつ動きはでています。私たちも、こめっこや同じ考えで活動されている方々に学びながら、活動を進めていきます。

〇こめっこでは先生方のお話を見るだけではなく、子供たち同士の交流を促すような取り組みもあったらいいなと思っています。交流を通して自発的に手話を身につけられるように…。最近は家でもこめっこぱんぱんをやったり、手話を使う頻度が増えたかなと思います。

〇実践と研究で進めておられるこめっこの取り組みに、いつも学ばせていただいています。また、今回初めてモアこめ、ほうこめのことを知り、こめっこと聴覚支援学校早期教育相談、幼稚部との連携についてもお聞きしたいと思いました。

〇乳幼児教育相談を担当しています。聴者の保護者に、手話を活用した難聴乳幼児へのわかる伝え方やかかわり方を理解してもらうことに困難を感じつつ奮闘しております。最近では経済的な理由から就労する保護者も多く、そのようなかかわりがさらに難しくなることを危惧しています。保護者の年齢からも共働きが多いことから、財政面での支援の必要性を強く感じています。こめっこでもそのような課題が見られるでしょうか。

〇国の早期発見･早期支援プロジェクトの中で人工内耳装用の推進や音声言語の使用の促進という動きが出ていますね。そういった中で、こめっこは手話の重要性を伝えるための研究をしているのは喜ばしいことです。まだ研究途中ではありますが、大阪から全国の医療機関、ST、聾学校などへ発信してほしいです。その理由は、聴者と聾者では、聴者の数が多く、「聴者集団の中で過ごしてほしい、そのために聴覚活用、話せるようになってほしい」という考えが強く、聾者から手話の重要性を伝えても、ピンと来ないようです。こめっこなら大学の先生方の力もありますし、研究を通して強い根拠を示すことができると思っています。これからもこめっこの活動を応援しています。

〇質疑応答で、保護者が子供の手話発達についていけなくなったとき、どうしたらよいか？という質問があり、それに対して、ろう成人（こめっこスタッフなど）に任せると良いという回答がありました。聴保護者、ろう児は毎日同じ家で生活をしているので、今この時に伝え合いたいのにうまく伝えられないという状況が起きているのではないかと思います。伝えられなければ、その場は親子の会話はない（仕方ない）ということでしょうか。それが、気になりました。手話環境を保障してあげたいけれど、その実現が難しい場合はどのようにしたらよいのか、周囲に、学校に理解を求めたいけれどどのように説明したらよいのか悩みます。

〇ろうの子どもたちが、第一言語（手話）をしっかり獲得する大切さを改めて感じました。指差しの発達や、子どもたちはことばを形成する能力を持っているということにとても興味を持ちました。言語は、形式と意味との2つの要素を持っていて、両方ともそろわないと、言語にはならないという話も分かりやすかったです。文字は自然言語なのか考えることで、手話が言語であることがさらに理解が深まりました。「みにくいあひるのこ」の文で何通りもの解釈が日本語の場合抑揚などでできること、それと同じように、手話は、うなずき、指差しをどこに入れるかで、解釈が変わってくるということから、手話を言語としてもきちんと学びたいと思いました。これらの研究が深まり、ろう乳幼児の手話獲得の環境が、良く変わり、全国に広がっていくと良いと思いました。0～3歳の間に大切にしていくことを、これからも学び続けながら、地域のろう乳幼児の手話獲得の機会を少しでも作っていけたらと思います。

〇昨年度は専門的なお話やデータが多く、やや難しく感じましたが、今回は言語習得に関しての内容や心理発達の事が分かりやすくて良かったです。特に音声言語習得中に手話言語を教えて(見せて)いいのかという質問をうやむやにせず議論して頂き答えていただけたのは、とても良かったです。

〇本人の状況と生育環境から、音声か手話かのどちらかを母語として 0～3 歳に獲得して認知発達の促進を図ることが重要だと思っていますので、最後の討論は理解しづらかったです。もちろん、セーフティネットとして手話を学ぶことにも賛成で、聴覚理解に難しさを抱えている0～3歳児が2つの言語を同時に獲得していくというより、2つの言語の習得と活用の機会が提供され、より理解しやすくより活用しやすい言語を、子ども自身が選択することができるような生育・育児環境の整備が必要だとあらためて感じました。その環境を提供されているこめっこさんの活動が、今後、更に発展することを願っています。

〇酒井先生、武井先生、河﨑先生のお話が、あらためてよく理解できました。特に、酒井先生のぶれないお話は、気持ちよく響き、指針にさせていただきます。古石先生もおっしゃっていましたが、耳鼻科のドクターが言語学の基本をお持ちでないことに驚きつつ、聞こえない子に関わるいろいろな専門職（通訳者も含めて）が、言語学のせめて基本を持っていてほしいと思いました。新スクリファーから、手話か音声言語かの2者択一と言っても、人工内耳や補聴器を使った音声言語の習得を目指した訓練と専門家が特には必要もない手話の獲得を同格には扱えないのではないでしょうか。そも、どちらかを選んで決める話ではないと思います。聞こえの十分ではない子が苦労せずに自然に獲得できる言語は手話だけだと（人工内耳や補聴器を使って戦略的に音声言語を得るとしても）、社会に普通に周知されることを願います。そんなに難しい話じゃないはずなのに。。。日本の聴者はほぼほぼモノリンガルの中で、バイリンガルの存在が尊重されることを願います。

〇こめっこに通う家族として、『しゅわまる』の創設も嬉しく思いましたが、河﨑先生の講演を聞いた方々が動かれて、創設する運びとなったということをお聞きして、河﨑先生の影響力はすごいなと感じました。また、今回 3 回目の視聴でしたが、毎年パネリストの方が変わり、様々な議論が交わされるので、興味深いです。そして、こめっこ活動の輪が毎年少しずつ広がっていることを実感します。最後に南先生と古石先生が議論された、補聴器、人工内耳装用児に対する手話の位置づけについては、やはり医師の立場と、言語学の立場では見方が違うのかなと感じました。将来的に、この方向性の違いが埋まり、こめっこや手話に理解を示してくれる医師が増えることを願います。

〇様々な分野の方のご登場で、広く深く学べたこと、とてもよかったです。オンラインなので、遠方の私が参加できる反面、運営、進行、操作等大変だったと思います。途中のトラブルも時間を取られたり見づらかったりと残念ではありましたが、それも想定内として仕方ないことと思っています。しかしながら、全体的に時間が足りなかったことが残念でした。様々な方々同士でのディスカッションをもう少し見たかったです。大切なテーマを掘り下げていただければもっといいものになったであろうと思われます。酒井先生のお話が事前に伺えていたら、もう少し余裕があっただろうなと残念です。個人的には、こめっこの活動・研究を尊敬し期待しています。また、こめっこ見学の際に偶然ご一緒した古石先生のお話に「そうだそうだ！」と感服したり、回を重ねるごとに貫録さえ感じる物井さんに拍手し、お若いままでより活動的な河﨑先生に拍手し、今回初登場（？）の中尾さんに声援を送ってしまいました(笑)。半面、自分が、日々の仕事に追われて、何も成果をあげていないことに忸怩たる想いも感じています。真面目な感想としては、今回新たに、きこえない・きこえづらい子どもに対する心の理論の検査を考えていること、きこえない一人の子がいる乳児院（？保育所）でのこめっこ配信の成果、南先生がご提示された FCEI のことなどを知ることができました。それに加え、この 2 時間半で、子どもたちが 0 歳から思春期に向かっていく過程の中で、言葉の発達、認知の発達、心の発達など、きこえない・きこえづらい子どもたちがどのような育ちをしていくことがより豊かに生きていけるのか…思いを馳せながら、耳と目と頭をフルに働かせていました。

〇明晴学園にもめだかがあり似てると思った。こういうシンポジウムのパネラーが同じ考え方の人ばかり集まると洗脳されそうな感じになるが、今回耳鼻咽喉科の医師がいたことで「人工内耳の児童に手話は必要ない」など一般に医師が思っているであろう発言をしてくれて、やっぱりディベートではないけれど、いろいろな考え方の人が参加したのはよかった。「日本語に集中する時間、手話に集中する時間を分ける」という考え方もいいと思った。

〇早期に分かる経験を積み重ねること、分かる経験をすることで分からないということが自分で分かって対応を考えられるというお話には、同時思いを持っており、心強く思いました。これは、聞こえる子であっても、手話であっても音声言語であっても、その子の育ちに必要なこ

とと思っています。

〇第２部、ディスカッション。皆さんのお話を聴いて、つよく感じたのは、子どもの手話獲得と、聴力を介した（補聴器、人工内耳などの使用による）口話による言語獲得とを、“二者択一”式にとらえた上で、聴力障害を有する子どもの発達支援の施策立案、意思決定等が“あたりまえ”として行われてきているという現状が、はっきり浮かび上がったやり取りだったのではないか、ということです。“あたりまえ”が、当をえたものかどうか、これを検証することが、こめっこにおける研究テーマの１つの柱であるということになるのでしょう。現在のこめっこの活動とそれによる子どもたちのすばらしい発達、成長の諸事例は、この結論を導出するための確固たる根拠になるものと思います。もっとも、こめっこは二者択一でなく、“そのどちらもだ”という立場に立って活動が進められているように思いますので、スタンスとしてはすでに明確に表明されていると思われます。言語脳科学の知見（酒井）によれば、外国語学習では、＋1 か国語より、＋2～3 か国語、またはそれ以上が、学習効果が非常に大きいという。これは外国語に限らず、言語学習についての話ですから、母語としてであろうが第二言語としてであろうが、手話もその 1 つに数えられることになります。また、今回シンポジウムでは、関西学院においては英語、仏語・・・手話が、並立した表記で、すでにカリキュラム化されているというお話も出されました。手話、そして可能なら口話を加え（この逆の場合もあるでしょう）、“複数の言語獲得を”という願いは、事実上、スローガンから研究における仮説になってきている、という確信が深まったというのが、わたしの、今回シンポジウム感想でした。

〇武居先生の指差しに関する研究が興味深かった。質問者に対する酒井先生の回答で、自然言語と人工言語の違いを明確に説明してくださったので、どの部分に焦点を当てる必要があるかがよくわかった。聞こえない子どもをもつ親に十分な情報が届くように、医療関係者にまず情報が届く必要があると思った。河﨑先生が手話は音声言語獲得を阻害しないとはっきり言い切ってくださったように、実際に接している方々が発信することばが親に届くと良いと思った。どれも興味深く拝見しました。来年のシンポジウムにも期待しています。

〇こめっこでの研究がとても進んでいるのに対して耳鼻科医の世界や厚労省では、ろう児の言語、心理発達に手話が欠かせないということの理解がまったく進んでいないと感じました。酒井先生、武居先生、河﨑先生のお話はすっきりと整理されていてわかりやすいのになぜこんなにも理解が進まないのでしょうか。手話が音声言語獲得の妨げになるという理論は根拠に乏しく、逆に手話を獲得させないことがろう児の言語発達を阻害するということのほうがずっと科学的だと感じました。こめっこの動画を見るだけでも一定の効果がみられたというのは貴重なデータだと思いました。こめっこの実際の運営とデータ収集・分析、結果の発信とそれぞれの両立は大変かと思いますが子どもたちの将来のためにぜひ続けてください。前川先生のお話で、奉仕員養成講座の問題点に軽く触れられていたと思いますが、まったく同

感です。地域の講座に、難聴児をもつ親御さん、職場のろう者と話したい、ろうのお客様に説明したい人などが通われていてそのニーズに応えきれていないと感じます。通訳者を育てるという視点で考えても質の高い通訳者を育てられる仕組みや講師のレベルではなく、もどかしく感じます。

〇南先生の発言の中に、医師の中には、人工内耳により音声日本語を獲得しようとしているのに手話が妨げになる。と思っている医師は多いと思う。とありましたが、聴覚に障害を持った子供を持った、経験の無い親御さんは、医師の言葉を信じて人工内耳をし、音声言語を獲得する事だけにとらわれてしまいそうな気がして怖くなりました。医師は、聴覚障害を持った子供の母語獲得に関して学び、選択する機会を与えるために様々な可能性について説明する義務があるのではないでしょうか？手話が言語であると認められた事や多様性がクローズアップされた事により、手話が身近に感じられる世の中になって来ましたが、最終的に音声か手話か選ぶのは本人だと思います。本人がスムーズに言語を獲得し選択できるようにするのが両親の役目であると考えるのであれば、やはり手話は音声と同時に必要なのだと思いました。古石先生から、漢字には意味があり見ると意味が分かる。聞こえない子供に対して使えないか。と言うお話が最後にありましたが、とても良い案だと思いました。今回も、こめっこの必要性をひしひしと感じました。

〇南先生のお話はとても良かったと思います。耳鼻科は本来外科系であること（手術で治す病気が多い）、2001 年から始まった ICF を医学部時代に習った医師の年齢は 2022 年現在 40 歳未満と考えられること、などから、現在 40 歳以上のまさに働き盛りの一般の耳鼻科医が手話のことを学ぶ機会など殆どなかったのです。南先生が、人工内耳 vs 手話の対立思考の人がいることは事実、とお答えになったのは実情を正直にお話しされたと思います。言語学に興味を持たれてよかったです。時代は変わり前進します。みんなで少しずつ 21 世紀を形作っていければと思います。第一言語に関して日本手話を第一言語に近くするには、週5日程度、毎日半日程度は手話に浸かる必要があるのでは？？と推測します。手話言語法が制定されて、手話だけの保育園がつくられ、保護者が希望すれば誰でも入れるようになったら素晴らしいと思います。ろうの大人が手話の話者としてその保育園に就労できるようになったらいいですね。古石先生へ。お元気で嬉しく存じます。末梢聴力が同じでも、脳内処理は人それぞれ、と同様に、末梢視力が同じでも脳内処理は人それぞれです。目が見えても手話がわかりにくい人もいるかもしれません（推測です）。また、漢字がもつ複雑な位置関係が理解できない人も少なからずおります（読み書き障碍）。それから、純正漢文は中国語とちがい音声で読まないようです（目で読む）、純正漢文の音声話者は存在しないようです。加藤徹先生の「漢文で知る中国」「漢文の素養」が面白いです。個人的には純正漢文を聴覚障碍児に教えることができたら本当に素晴らしいと思います（音声記号なしですから）。でもそれには人材育成が必要、日本手話で純正漢文を教える技術が必要です

から、2世代必要で、少なくとも30年くらいかかると推測します。

〇耳鼻咽喉科の南先生が このような難聴やろうの子供に手話が大事という内容のこの講演でも最後のコメントで人工内耳をすることで 難聴が聞こえる子と同じ になると思っているような発言に 聴覚に障害のある子供さんを持つ親は本当に 悩んでしまうだろうなと思いました。難しい内容でしたがとても多くのことを学ばせていただきました。仕事関係で聴覚に障害のある赤ちゃんと接していますが 本日の講演を大いに活かしていきたいと思います。

〇南先生のお話しがとても心に残りました。バイリンガルのあり方です。日本手話は、すごく大切です。でも音声言語も含めて考える時に、南先生のお話しにある「どちらもやっていればいいというものではない。やり方なんだ。」というのが心に響きました。

〇様々な専門分野の先生方のお話、大変勉強になりました。質問を躊躇しましたが、同様の質問をしてくださった古石先生ありがとうございました。回答に対し改めての質問、また他の先生方の補足解答に安心しました。

〇当事者であり、素晴らしいロールモデルである前川さんのお話が印象的だった。きこえない子が手話を習得し、成長できる場が増える事を願います。聴覚支援学校や小学校、支援学級、通級学級の現状も聞いてみたい。

〇ディスカッションがとても充実していたと思います。早期からの手話獲得が聴こえない子どもにとっていかに重要であるか、そして、それは人工内耳装用による聴覚活用を妨げるどころか、むしろ双方が互いに影響して、子どもの言語や認知の力を伸ばすということがディスカッションの中で明確になっていたので良かったと思います。また、前川氏のデフ・スペースの指摘も忘れてはならない視点でハッとしました。

〇最後に古石先生から酒井先生にされた、文字学習と聞こえないこども達の言語獲得についてのご質問に、とても関心があります。なんらかの形で、酒井先生のご回答を知ることができると嬉しいです。

〇母語としての手話獲得が、人工内耳や補聴器の性能があがっても如何に大切かがよくわかった。酒井先生の「わからないことがわかる」という言葉が印象的でした。

〇酒井先生は科学者なので言い切ることができて強いと思いました。

〇酒井先生のお話はできれば事前視聴をしたかったです。知識不足の私にとっては内容が

難しい上に、お話も速くて。難聴でもあるので、音声のクリアな方とそうでない方では、聞きながらメモがとれるかどうかで、だいぶ理解度が違いました。こめっこの活動はなんとなくお伺いしていましたが、しっかり見たのは初めてで、とてもとても勉強になりました。

〇武居先生の一語文と二語文のプロセスにおける、指差しの活用についてのお話が、とても興味深かったです。

〇皆様の貴重なお話、大変興味深く、勉強になりました。特に、武居先生がおっしゃっていた、わからないということに気づくことは、自分の身のまわりの世界を把握していく上でも、非常に重要なことだと思いました。

〇手話の講義の本で武居先生を知り興味を持ちました。言語獲得の時期を逃さないこと、手話の大切さを改めて学びました。

〇武居先生の手話環境があると聞こえない子どもの喃語、手が動き出すというお話にとても興味を持ちました

〇手話は言語であると言うのは以前から知っていた。形式的、意味的 2 つの要素があって言語として成り立つと言うのは興味深かった。赤ちゃんの喃語、聴覚障害児も健聴児も同じような発達過程をたどると言うのも知らなかった。自分が理解した分かってもらった経験があるから『分からない』が解るって言われてみたら その通りだと感じた。だからそこ、0〜3 才の頃から手話で理解しあえるコミュニケーションが大事なのだとよく理解できた。

〇武居先生、河﨑先生のご講演で、手話の重要性に対する理解がさらに深まりました。特に武居先生には科学的な視点で手話言語の発達をわかりやすく解説していただき、とても興味深く拝聴しました。

〇河﨑先生の講演を聞いて「こめっこ」の取り組みは、乳幼児に手話獲得を行うこと、ろうの先輩と触れ合うことだけでなく2点大事なことがあるのを改めて知ることができた。それは、1．子供と両親（家族）の心のアフターケアをする。2．「こめっこ」の成果として乳幼児の手話言語獲得の状況、それに伴う心理的発達の経過を残す研究を行うことの2つである。

〇多方面の専門家たちが、聴覚障害の子供のことを、将来幸せにすごせるようにと実践している施設が存在していてありがたいと思った。自然に育っていく過程で、手話を学べることは、大切なことだと実感しています。我が子が耳が聞こえないと知ったときの親たちの不安が、子供たちを育てる喜びに変わるのは、こめっこの支援によるところが大きいです。赤ちゃん

の時の親子のかかわりのなかでの情緒の伝え方が子供の成長には欠かせないということは聴者の子供も同じです。

〇バイリンガル教育には 0〜3 歳時の第一言語獲得がとても大切であり、その根があることが次の言語習得に繋がることを学びました。蓮の葉のお話、とても分かりやすかったです。補聴器や人工内耳装用児に対して音声と手話学習時間を分けた方が良いという視点も勉強になりました。STとして日々の療育で、ダウン症児のように認知発達がゆっくりなお子さまには概念形成や表出手段の 1 つとして音声と手話の同時活用も良いと個人的に考えていましたが質問できずに終了してしまいました。

〇大変興味深い内容だったと思います。耳鼻科の医師と言語学者が直接議論する機会を入れたのが非常に興味深く、また問題の深さを改めて感じた次第です。

〇耳鼻咽喉科の先生が参加されて、古石先生と討論されたことが良かったと思います。耳鼻咽喉科の中での先生方の認識を垣間見た気がします。

〇脳科学からの酒井先生のお話がおもしろかった。手話が絶対といいきらない南先生の立場もおもしろかった。

〇これまで言語学の本が難解なことで理解出来ていないことが多いのですが、酒井先生のお話は興味深く、また、南医師の発言も興味深く感じた。いろいろなスタンスの発言者なだけに、もっと意見交換、協議の時間が欲しかった。

〇こめっこの素晴らしい活動内容を知ることができました。河﨑先生がおっしゃっていた「ママの母語である日本語に自然に手話をのせてくれればいい」という話はその通りだと思いました。突然きこえない赤ちゃんのママになり、不安で押しつぶされそうになっているママに寄り添う言葉ですね。理想は日本手話ですが、きこえるママが使うのは現実として難しい。少しずつ赤ちゃんと一緒に成長していければいいのかなと思います。
最後に古石先生がおっしゃった「耳鼻科の先生も言語学を学んでほしい」という意見に大きくうなずきました！ 多くの学びがありました。

〇医師関係は考え方はまとまっていないけれど、力は持っているので、古石先生の言われたように、たくさんの方に、手話の入り口からろうの方に接してほしいと思います。私は、現在、大阪市立大学 1 年で、昔の聞こえない教え子へのインタビューを通して「心の理論」の発達について考えています。第一部の河﨑先生の言葉にも「心の理論」が出てきましたが、心の発達というか、成長こそ大事だと思っています。

〇耳鼻科は本来外科系であること（手術で治す病気が多い）、2001 年から始まった ICF を医学部時代に習った医師の年齢は 2022 年現在 40 歳未満と考えられること、などから、現在 40 歳以上のまさに働き盛りの一般の耳鼻科医が手話のことを学ぶ機会など殆どなかったのです。
南先生が、人工内耳 vs 手話の対立思考の人がいることは事実、とお答えになったのは実情を正直にお話しされたと思います。言語学に興味を持たれてよかったです。時代は変わり前進します。みんなで少しずつ 21 世紀を形作っていければと思います。
第一言語に関して
日本手話を第一言語に近くするには、週5日程度、毎日半日程度は手話に浸かる必要があるのでは？？と推測します。手話言語法が制定されて、手話だけの保育園がつくられ、保護者が希望すれば誰でも入れるようになったら素晴らしいと思います。ろうの大人が手話の話者としてその保育園に就労できるようになったらいいですね。
末梢聴力が同じでも、脳内処理は人それぞれ、と同様に、末梢視力が同じでも脳内処理は人それぞれです。目が見えても手話がわかりにくい人もいるかもしれません（推測です）。また、漢字がもつ複雑な位置関係が理解できない人も少なからずおります（読み書き障碍）。それから、純正漢文は中国語とちがい音声で読まないようです（目で読む）、純正漢文の音声話者は存在しないようです。加藤徹先生の「漢文で知る中国」「漢文の素養」が面白いです。個人的には純正漢文を聴覚障碍児に教えることができたら本当に素晴らしいと思います（音声記号なしですから）。でもそれには人材育成が必要、日本手話で純正漢文を教える技術が必要ですから、2世代必要で、少なくとも30年くらいかかると推測します。